

FUJITSU Server PRIMEQUEST 3000シリーズ Windowsディスク設計ガイド

CA92344-2154-03

- はじめに
- 1. 前提知識
 - 1.1 ディスク用語の説明
- 2. ディスク設計
 - 2.1 設計が必要なブートデバイス
 - 2.2 導入に必要な設計作業
 - 2.3 ブート形式の選択
 - 2.4 ディスクの信頼性/アレイ機能の比較
 - 2.5 ディスク容量見積もり
 - 2.6 ディスク形式の選択

- 3. 内蔵ディスクブートに必要な設計
 - 3.1 内蔵ディスクブート環境の設計概要
 - 3.2 内蔵ディスクブート環境の設計フロー
 - 3.3 内蔵ディスク搭載コンポーネントの選択
- 4. SANブートに必要な設計
 - 4.1 SANブート環境の設計概要
 - 4.2 SANブート環境の設計フロー
 - 4.3 PRIMEQUESTの設定
 - 4.4 ETERNUSの基本情報設計
 - 4.5 外部アレイディスク装置側の設計
 - 4.6 スイッチの設計
 - 4.7 ストレージシステム接続図の作成

■ 5. 構成例

- 5.1 内蔵ディスクブート構成例①
- 5.2 内蔵ディスクブート構成例②
- 5.3 内蔵ディスクブート構成例③
- 5.4 FCブート構成例①
- 5.5 FCブート構成例②
- 5.6 iSCSIブート構成例
- 5.7 FCoEブート構成例

■ 付録A. システムバックアップ

- A.1 バックアップソフトウェアの選択
- A.2 バックアップとディスク

■ 本文中の略称

名称	略称	
Microsoft® Windows Server® 2012 R2 Standard	Windows Server 2012 R2	Windows
Microsoft® Windows Server® 2012 R2 Datacenter		
Microsoft® Windows Server® 2016 Standard	Windows Server 2016	
Microsoft® Windows Server® 2016 Datacenter		
Microsoft® Windows Server® 2019 Standard	Windows Server 2019	
Microsoft® Windows Server® 2019 Datacenter		

■ 本文中の略称

名称	略称	
PRIMEQUEST 3400S2 Lite	PRIMEQUEST 3400S2 Lite / 3400S2 / 3400E2 / 3400L2 / 3800E2 / 3800L2	PRIMEQUEST 3000シリーズ または PRIMEQUEST
PRIMEQUEST 3400S2		
PRIMEQUEST 3400E2		
PRIMEQUEST 3400L2		
PRIMEQUEST 3800E2		
PRIMEQUEST 3800L2		
PRIMEQUEST 3400S Lite	PRIMEQUEST 3400S Lite / 3400S / 3400E / 3400L / 3800E / 3800L	
PRIMEQUEST 3400S		
PRIMEQUEST 3400E		
PRIMEQUEST 3400L		
PRIMEQUEST 3800E		
PRIMEQUEST 3800L		

■ 本文中の略称

名称	略称	
システムボード	SB	
マネジメントボード	MMB	
Baseboard Management Controller	BMC	
Converged Network Adapter	CNA	
Fibre Channel over Ethernet	FCoE	
IOユニットE	IOUE	
ディスクユニット	DU	
Disk Unit SAS	DU_SAS	DU
Disk Unit PCIEA	DU_PCIEA	
Disk Unit M	DU_M	
M.2 Flash モジュール	M.2	
Unified Extensible Firmware Interface	UEFI	
Hard Disk Drive	HDD	
Solid State Drive	SSD	
ServerView Installation Manager	SVIM	

■ 本文中の略称

名称	略称
FUJITSU Server PRIMEQUEST 3000 シリーズ 用語集・略語集	用語集・略語集
FUJITSU Server PRIMEQUEST 3000 シリーズ 製品概説	製品概説
FUJITSU Server PRIMEQUEST 3000 シリーズ 導入マニュアル	導入マニュアル
FUJITSU Server PRIMEQUEST 3000 シリーズ 運用管理ツールリファレンス(MMB)	運用管理ツールリファレンス
FUJITSU Server PRIMEQUEST 3000 シリーズ 運用管理ツールリファレンス(UEFI)	
PRIMEQUEST 3000 シリーズ 運用管理ツールリファレンス (sadump, Dynamic Reconfiguration)	
FUJITSU Server PRIMEQUEST 3000 シリーズ SAN ブート環境構築マニュアル Emulex(Broadcom)製ファイバーチャネルカード編	SAN ブート環境構築マニュアル
FUJITSU Server PRIMEQUEST 3000 シリーズ SAN ブート環境構築マニュアル QLogic(Cavium)製ファイバーチャネルカード編	
FUJITSU Server PRIMEQUEST 3000 シリーズ FCoE ブート環境構築マニュアル	FCoE ブート環境構築マニュアル
FUJITSU Server PRIMEQUEST 3000 シリーズシステム構成図 (PRIMEQUEST 3400S Lite / 3400S / 3400E / 3400L / 3800E / 3800L)	システム構成図
FUJITSU Server PRIMEQUEST 3000 シリーズシステム構成図 (PRIMEQUEST 3400S2 Lite / 3400S2 / 3400E2 / 3400L2 / 3800E2 / 3800L2)	
FUJITSU Server PRIMEQUEST 3000 シリーズ構成設計ガイド	構成設計ガイド
FUJITSU Server PRIMEQUEST 3000 シリーズ Windowsネットワーク設計ガイド	Windowsネットワーク設計ガイド
Windows Server 2008/2008 R2/2012/2012 R2/2016 大容量メモリダンプファイル設計ガイド	大容量メモリダンプファイル 設計ガイド

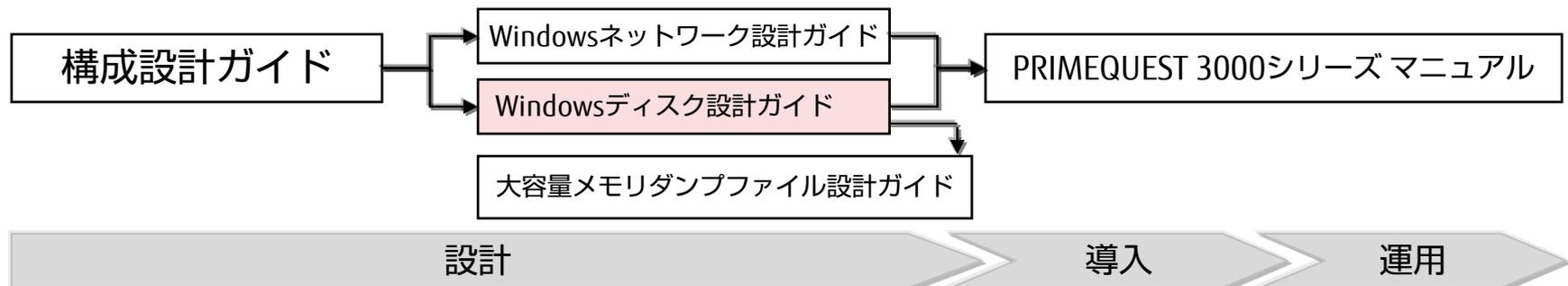
■ 本書の読み方

■ 本書の内容

PRIMEQUEST 3000シリーズでWindowsを使用される方を対象に、ディスク設計の考え方、留意事項などについて記載しています

- 具体的な操作などの情報については、PRIMEQUEST 3000シリーズ本体のマニュアルを参照してください
- サポートOSについてはFUJITSU Server PRIMEQUEST 3000シリーズ Windows Server情報のサポート情報を参照してください
<https://www.fujitsu.com/jp/products/computing/servers/primequest/products/3000/os/windows/>
- サポートするシステム構成や周辺機器についてはFUJITSU Server PRIMEQUEST 3000シリーズのシステム構成図を参照してください
<https://www.fujitsu.com/jp/products/computing/servers/primequest/products/3000/catalog/>
- 周辺機器および各ミドルウェアのWindows Serverのサポート状況については、PQ3000のWindows Serverサポート情報を参照してください
<https://www.fujitsu.com/jp/products/computing/servers/primequest/products/3000/os/windows/>

ガイド間の記事の流れ



■ 本文中の記号

本文中に記載されている記号には、次のような意味があります。

記号	意味
	参照ページや参照ドキュメントを示しています。

- ・Microsoft、Windows、Windows Server、SQL Serverは、米国Microsoft Corporationの米国およびその他の国における登録商標または商標です
- ・Intellは、アメリカ合衆国および / またはその他の国における Intel Corporation またはその子会社の商標です
- ・Oracleは、Oracle Corporation 及びその子会社、関連会社の米国及びその他の国における登録商標です
- ・Arcserveは、Arcserve (USA), LLC.またはその子会社の登録商標または商標です
- ・Emulexは、米国Emulex Corporation の登録商標です
- ・QLogicは、QLogic Corporation の商標または登録商標です
- ・そのほか、本書に記載されている会社名および製品名は、それぞれ各社の商標または登録商標です
- ・本書に記載されているシステム名、製品名等には、必ずしも商標表示（(R)、TM）を付記していません

■ Windows Server を導入するにあたって

PRIMEQUESTにWindows Server 2019 / 2016 / 2012 R2を導入するさいはマイクロソフト社より公開されている最新の累積的な更新プログラムを適用してください。

留意事項の詳細は下記を参照してください。

- FUJITSU Server PRIMEQUEST 3000シリーズ Windows Server 2019 留意事項
<https://www.fujitsu.com/jp/products/computing/servers/primequest/products/3000/os/windows/support/2019/consideration/index.html>
- FUJITSU Server PRIMEQUEST 3000シリーズ Windows Server 2016 留意事項
<https://www.fujitsu.com/jp/products/computing/servers/primequest/products/3000/os/windows/support/2016/consideration/index.html>
- FUJITSU Server PRIMEQUEST 3000シリーズ Windows Server 2012 R2 留意事項
<https://www.fujitsu.com/jp/products/computing/servers/primequest/products/3000/os/windows/support/2012/r2/consideration/index.html>

1. 前提知識

PRIMEQUESTでWindowsを起動するために必要な
ディスク形式の基礎知識について説明します

1.1 ディスク用語の説明(1/3)

■ 用語使い分け

本書では、説明の切り口により、以下の用語を使い分けている

用語	説明
ブートパーティション システムパーティション	<u>ブートパーティション</u> Windows OSファイルとサポートファイルが保存されるディスクボリューム <u>システムパーティション</u> Windowsの起動に必要なハードウェア固有ファイルが保存されるディスクボリューム どちらもWindows起動に必要なファイルで、同じディスクボリュームに格納する機会が多いため、本書ではこれらの領域をシステム領域と呼ぶ
データパーティション	Windows起動に必要なファイルが存在しない、ユーザーデータが格納されるパーティション 本書ではデータ領域と呼ぶ

 単に「パーティション」と記載した場合、PRIMEQUESTの「ハードウェアパーティション」を意味することもある。PRIMEQUESTで使われる用語については『用語集・略語集』を参照

1.1 ディスク用語の説明(2/3)

■ ディスク形式

ディスク形式にはMBR(Master Boot Record)ディスク形式とGPT(GUID Partition Table)ディスク形式がある

ディスク形式	パーティション数	最大サイズ
MBR	最大4個のプライマリパーティション 拡張パーティション内で無制限の論理ドライブ	2テラバイトまでの ボリューム
GPT	最大128個のプライマリパーティション	18エクサバイトまでの ボリューム(*1)

(*1) NTFSとしては256テラバイトまでのサイズをサポートする

1.1 ディスク用語の説明(3/3)

■ ブートオプションとインストールOS

- システム領域のディスク形式は、インストール用のメディアをUEFIメニューのどちらのブートオプションで起動したかにより決定される(*1)
- ブートオプションにより、インストール可能なOSが異なる

選択したブートオプション(*2)	インストール可能OS	ディスク形式
Legacy Boot	レガシーOS およびUEFI Aware OS	MBR
UEFI [UEFI: デバイス名またはUEFI: デバイス名 n (n=0, 1, 2・・・)]	UEFI Aware OS	GPT

*1) データ領域のディスク形式は、Windowsの[ディスクの管理]コンソールで、ディスクを初期化するさいに MBR/GPT形式いずれかを選択できる

*2) UEFIメニュー[Boot manager]から選択する

 ブートオプションについては『運用管理ツールリファレンス』を参照

1.1.1 MBR形式へのインストール

■ MBR形式のパーティションについて

ブートオプションをLegacyにしてWindowsをインストールすると、次の2種のパーティションが作成される。

☞ Legacyにおけるパーティション構成については『マイクロソフトページ、BIOS/MBR-based hard drive partitions <https://docs.microsoft.com/en-us/windows-hardware/manufacture/desktop/configure-biosmbr-based-hard-drive-partitions>』を参照

- システム予約済みパーティション
bitlockerや、Windowsが起動できなくなった場合に利用する、回復ツールがインストールされるパーティション
- プライマリパーティション
Windows Server OSがインストールされるパーティション

1.1.2 GPT形式へのインストール(1/2)

■ GPT形式のパーティションについて

ブートオプションをUEFIにしてWindowsをインストールすると作成されるパーティションは以下のような用途である、次の4種のパーティションが作成される。

 UEFIにおけるパーティション構成については『マイクロソフトページ UEFI / GPT based hard drive partitions <https://docs.microsoft.com/en-us/windows-hardware/manufacture/desktop/configure-uefigpt-based-hard-drive-partitions>』を参照

■ 回復パーティション

Windowsが起動できなくなった場合に利用する、回復ツールがインストールされるパーティション

■ ESP(Extensible Firmware Interface System Partition)

NTLDR、HAL、ドライバーなどシステムをブートするために必要なファイルを格納したパーティション。ユーザが領域操作する機会はない

■ MSR(Microsoft 予約)パーティション

他のシステムパーティションに関する情報を格納したパーティション。ユーザは領域操作できない

■ プライマリパーティション

Windows Server OSがインストールされるパーティション

1.1.2 GPT形式へのインストール(2/2)

■ GPT形式の領域表示

ESP、MSRはWindowsのディスク管理画面には表示されないため、Diskpart.exeコマンドで確認する

【Diskpart.exe 実行結果 (*1)】

```
DISKPART> select disk 0
ディスク 0 が選択されました。
DISKPART> list disk

   ディスク   状態   サイズ   空き   ダイナ   GPT
   ###         127 GB   62 GB   ミック
-----
* ディスク 0   オンライン   127 GB   62 GB   *

DISKPART> list partition

Partition ###  Type          Size      Offset
-----
Partition 1   回復          499 MB   1024 KB
Partition 2   システム      99 MB    500 MB
Partition 3   予約          16 MB    599 MB
Partition 4   プライマリ    64 GB    615 MB
```

GPT形式の場合に *が付く

Partition 2がESP
Partition 3がMSR

【Windowsのディスク管理画面(*1)】



*1) Windows Server 2019 画面出力例

1.1.3 SVIMインストール時のパーティション(1/2)

- インストールの方式で作成されるパーティションが異なる
SVIM(クイック/ガイドモード)を使用した場合と、OSメディアから手動でインストールした場合で、作成されるパーティション構成が異なる。
- MBR形式でインストールした場合のパーティション構成とサイズ

インストール方法 (*1)	作成されるパーティション	Windows Server		
		2012 R2	2016	2019
SVIM (*2) ガイド/クイックモード	システム予約済み パーティション	500MB	500MB	500MB
	プライマリパーティション	任意サイズ	任意サイズ	任意サイズ
手動	システム予約済み パーティション	350MB	500MB	549MB
	プライマリパーティション	任意サイズ	任意サイズ	任意サイズ

*1) 添付のドライバやアプリケーションのインストールが容易になるため、SVIMによるインストールを推奨

*2) パーティション構成とサイズはSVIM V13.19.04を使用した場合

👉 SVIM使用時のパーティションはSVIMのバージョンによって異なる

詳細は『ServerView Installation Manager (SVIM) 補足情報』を参照

<http://jp.fujitsu.com/platform/server/primergy/products/note/svsdvd/additional-info.html>

1.1.3 SVIMインストール時のパーティション(2/2)

■ GPT形式でインストールした場合のパーティション構成とサイズ

インストール方法 (*1)	作成されるパーティション	Windows Server		
		2012 R2	2016	2019
SVIM (*2) ガイド/クイックモード	回復パーティション	450MB	450MB	1024MB
	ESP	100MB	260MB	260MB
	MSR	128MB	16MB	16MB
	プライマリパーティション	任意サイズ	任意サイズ	任意サイズ
手動	回復パーティション	300MB	450MB	499MB
	ESP	100MB	100MB	100MB
	MSR	128MB	16MB	16MB
	プライマリパーティション	任意サイズ	任意サイズ	任意サイズ

*1) 添付のドライバやアプリケーションのインストールが容易になるため、SVIMによるインストールを推奨

*2) パーティション構成とサイズはSVIM V13.19.04を使用した場合

SVIM使用時のパーティションはSVIMのバージョンによって異なる

詳細は『ServerView Installation Manager (SVIM) 補足情報』を参照

<http://jp.fujitsu.com/platform/server/primergy/products/note/svsdvd/additional-info.html>

2. ディスク設計

PRIMEQUEST 3000シリーズにWindowsを導入するために必要なディスク設計作業を説明します

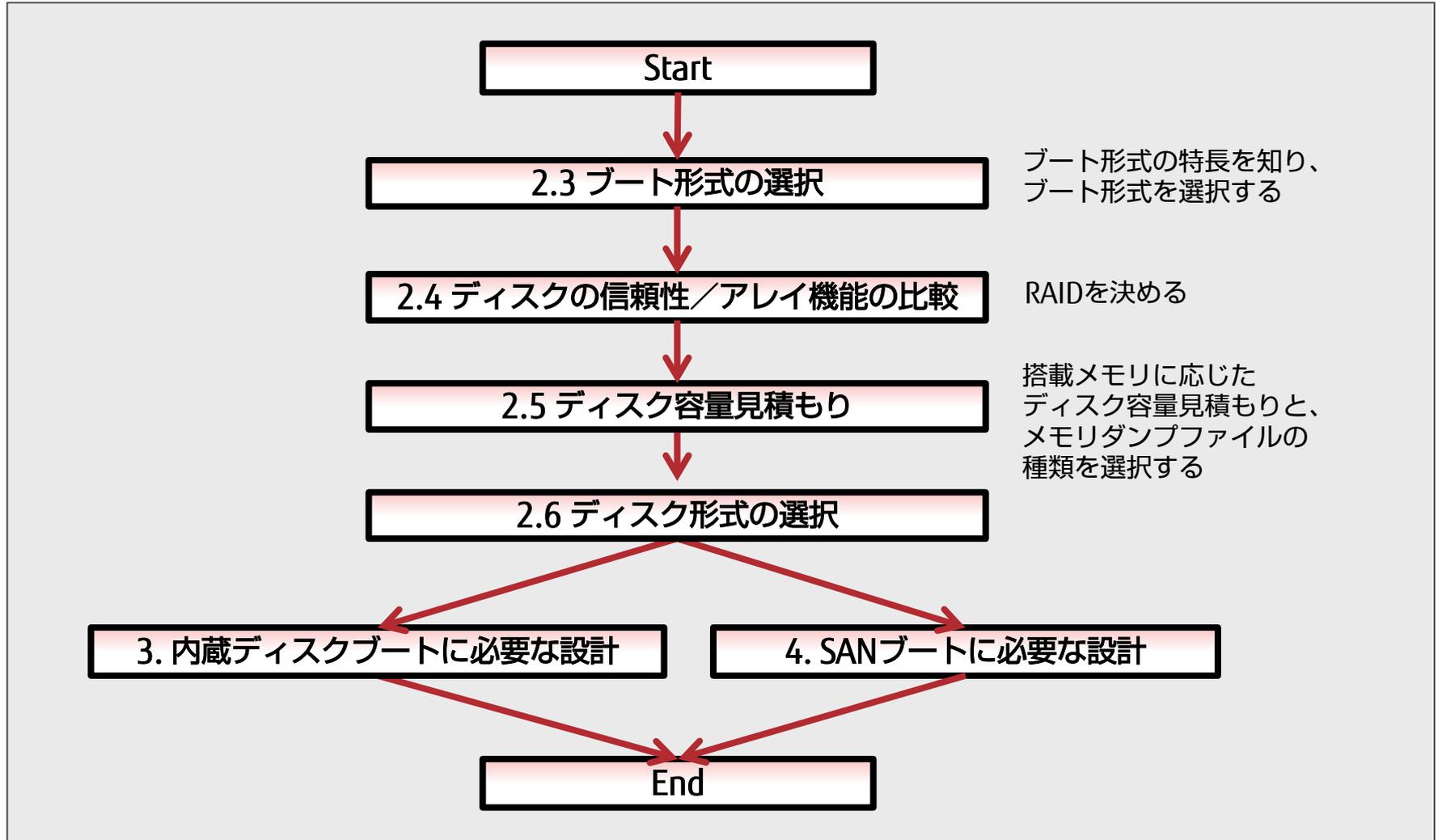
■ 設計が必要なブートデバイス

以下のブートデバイスについて説明する

- SB上に搭載されたM.2
- DU_SAS、DU_Mに搭載されたRAIDカードに接続されているHDD/SSD
- DU_PCIEAに搭載されたRAIDカードに接続されているPCIe SSD SFF
- SASアレイコントローラカード接続の外付けハードディスクキャビネットに搭載されたHDD/SSD
- IOUE/PCIボックス搭載のFCカードに接続された外部アレイディスク装置
- IOUE/PCI ボックス搭載のCNAを利用したFCoE接続による外部アレイディスク装置
- IOUE/PCI ボックス搭載のCNAを利用したiSCSI接続による外部アレイディスク装置

2.2 導入に必要な設計作業

■ ディスク設計について次の手順で行う



2.3 ブート形式の選択

■ 要件に合うブート形式を選択する

■ 本書では、ブート形式を以下のとおり定義して説明する

ブート形式		システム領域への接続デバイス	特徴
内蔵ディスクブート		<ul style="list-style-type: none"> SB上のスロット 	<ul style="list-style-type: none"> M.2にOSを格納してブートする方式(*2) 1筐体のシンプルな構成 FCスイッチなどの接続設計が不要
		<ul style="list-style-type: none"> DU搭載のRAIDカード 	<ul style="list-style-type: none"> 内蔵ドライブにOSを格納してブートする方式 1筐体のシンプルな構成 FCスイッチなどの接続設計が不要 PCIe SSD SFFは、システム領域として利用できる内蔵ディスクの中で最も高速
外付けハードディスクキャビネット(*1)		<ul style="list-style-type: none"> SASアレイコントローラカード 	<ul style="list-style-type: none"> 外部ハードディスクキャビネットにOSを格納してブートする方式
SANブート	FCブート	<ul style="list-style-type: none"> IOUEまたはPCIボックス搭載のFCカード 	<ul style="list-style-type: none"> FCプロトコルを利用して接続した外部のアレイディスク装置へOSを格納してブートする方式 光ファイバーを使用した高速データ転送が可能 システム領域/データ領域を同じストレージへ配置できるため、ディスクを一元管理しやすい SAN(FC)ブートの導入実績は十分多い Emulex相当品FCカード/CNAとQLogic相当品FCカードの混在不可
	iSCSIブート	<ul style="list-style-type: none"> IOUEまたはPCIボックス搭載のCNA(*3) 	<ul style="list-style-type: none"> iSCSIプロトコルを利用して接続した外部のアレイディスク装置へOSを格納してブートする方式 専用機器やケーブル不要 システム領域/データ領域を同じストレージへ配置できるため、ディスクを一元管理しやすい
	FCoEブート	<ul style="list-style-type: none"> IOUEまたはPCIボックス搭載のCNA 	<ul style="list-style-type: none"> FCoEプロトコルを利用して接続した外部のアレイディスク装置へOSを格納してブートする方式 FC-SAN環境とLAN環境を統合したネットワークを実現 既存のFC-SAN環境とLAN環境を統合できる

*1) 設計ポイントは内蔵ディスクブートと同じ *2)UEFIで起動するときのみサポート

*3) PRIMEQUEST 3400S Lite / 3400S / 3400E / 3400L / 3800E / 3800LのWindows Server 2012 R2およびWindows Server 2016のみサポート

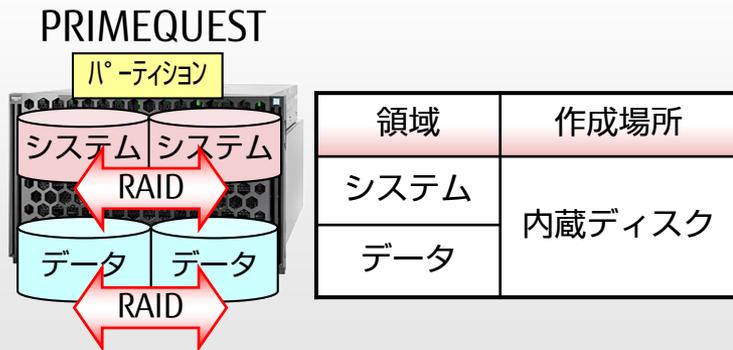
2.3.1 システム領域/データ領域の配置

■ ディスク配置とブート形式の選択

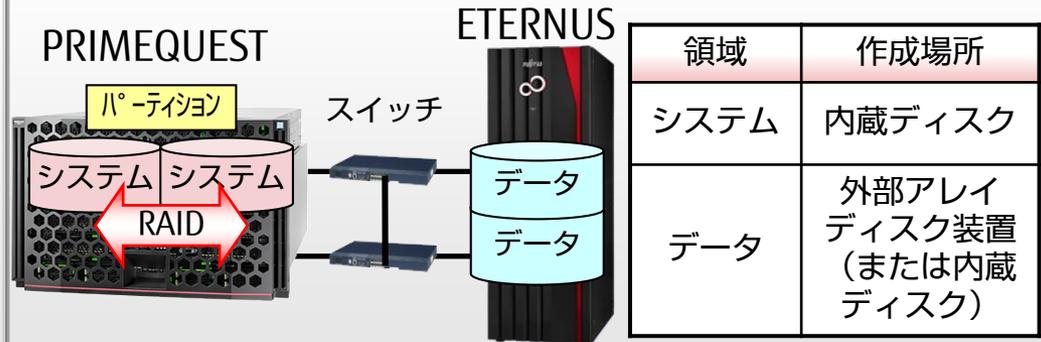
■ 各ブート形式のディスク配置イメージ

1. 内蔵ディスクブート構成

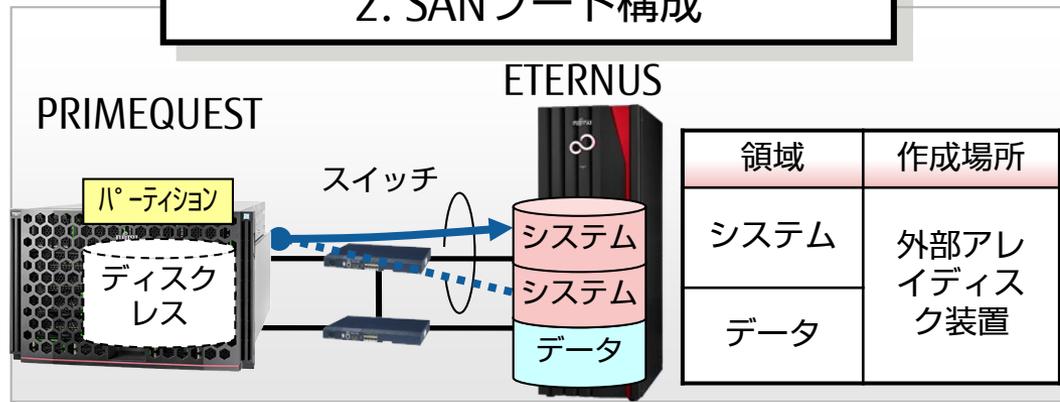
システム領域とデータ領域を内蔵ディスクへ配置



システム領域は内蔵ディスクへ、
データ領域は外部アレイディスク装置へ配置



2. SANブート構成



2.3.2 内蔵ディスクブート構成の特長(1/2)

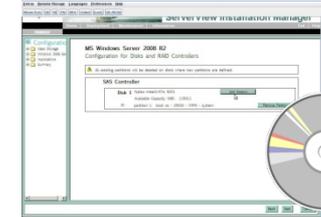
■ システム領域とデータ領域を内蔵ディスクへ配置する場合

■ 一つの筐体でシンプルなシステム構成、低コスト

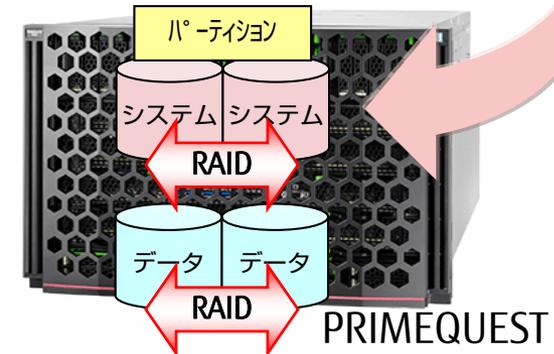
- Windowsインストール時にSVIM画面でRAID(*1)設定をおこなうのみ
- FCスイッチ等の接続設計不要

*1) RAIDコントローラの冗長化にはソフトウェアRAIDが必要だが推奨しない(P31参照)
RAIDコントローラを冗長化したい場合はSANブート形式を利用すること

Windowsインストール時のSVIM RAID構築



システム領域を内蔵ディスクに構築



HDD/SSD、PCIe SSD SFFの容量の詳細については『製品概説』の内蔵記憶装置を参照

内蔵ディスク装置 諸元(PRIMEQUEST 3800E2の例)			
	SB (最大4枚/筐体)	DU_SAS(最大2個/筐体) DU_M(最大4個/筐体)	DU_PCIEA (最大2個/筐体)
対応ディスク	M.2 (最大2本/SB)	HDD/SSD(最大24本/筐体) *DU_SAS/DU_M1個あたり4本	PCIe SSD SFF(最大8本/筐体) *DU_PCIEA1個あたり4本
ディスク 1本あたりの 容量	• SSD : 240GB, 480GB	• HDD : 300GB,600GB, 900GB,1.2TB, 1.8TB,2.4TB	• SSD : 400GB,800GB, 1.6TB,3.2TB, 6.4TB
RAIDレベル(*2)	0, 1	0, 1, 5, 6, 10, 1E	

RAID構成時のLUN最大容量(PRIMEQUEST 3800E2の例)(*3)					
1個のLUNではM.2は最大2本、SSD/HDD、PCIe SSD SFFは最大4本搭載可能					
		M.2	HDD	SSD	PCIe SSD SFF
RAID レベル	なし	480GB	2.4TB	6.4TB	6.4TB
	0	960GB	9.6TB(x4)	3.2TB(x4)	25.6TB(x4)
	1	480GB	2.4TB(1+1)	6.4TB(1+1)	6.4TB(1+1)
	5	-	7.2TB(3+1)	19.2TB(3+1)	19.2TB(3+1)
	6	-	4.8TB(2+2)	12.8TB(2+2)	12.8TB(2+2)
	10	-	4.8TB(2x2)	12.8TB(2x2)	12.8TB(2x2)
	1E	-	4.8TB(4/2)	12.8TB(4/2)	12.8TB(4/2)

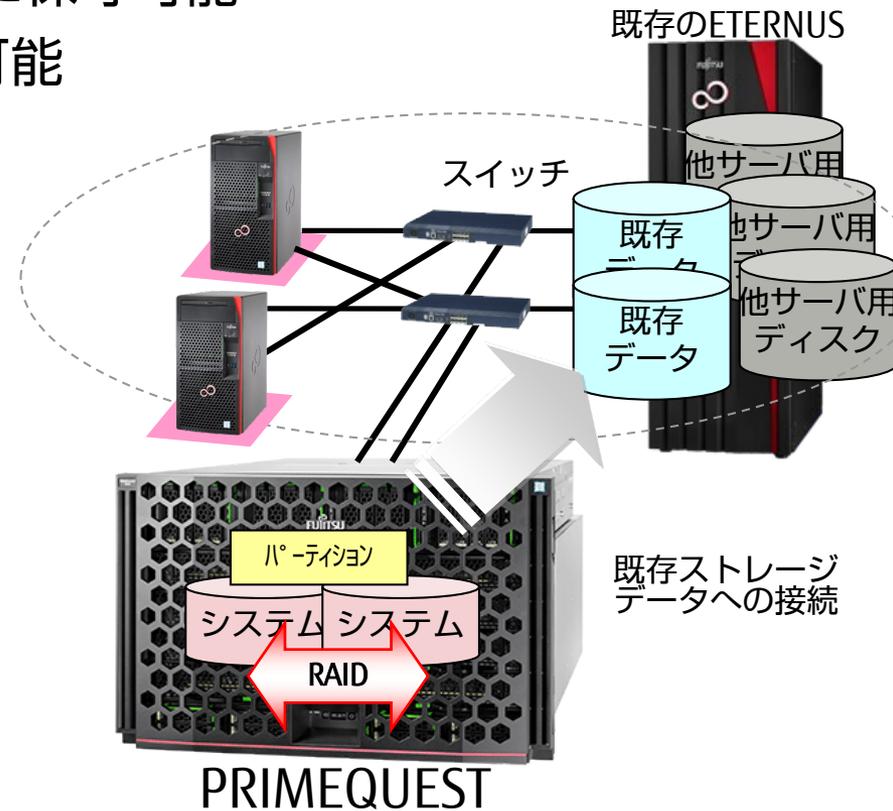
PRIMEQUEST 3400S Lite / 3400S / 3400E / 3400L / 3800E / 3800Lの対応ディスクの詳細は『システム構成図』を参照

*2) システム領域ではRAID 0は非推奨 *3) M.2あたり480GB換算、HDDあたり2.4TB換算、SSDあたり6.4TB換算、PCIe SSD SFFあたり6.4 TB換算とした最大容量

2.3.2 内蔵ディスクブート構成の特長(2/2)

- システム領域は内蔵ディスクへ、データ領域は既存のETERNUSへ配置する場合
 - PRIMERGYからの移行やPRIMEQUESTシステム増強において、ETERNUS構成を維持したまま容易に保守可能
 - 接続するだけで既存データを利用可能

内蔵ディスク装置 諸元
👉 『2.3.2 内蔵ディスクブート構成の特長(1/2)』を参照
外部アレイディスク装置への接続方法
FC/iSCSI/FCoE接続 👉 接続諸元は『システム構成図』を参照



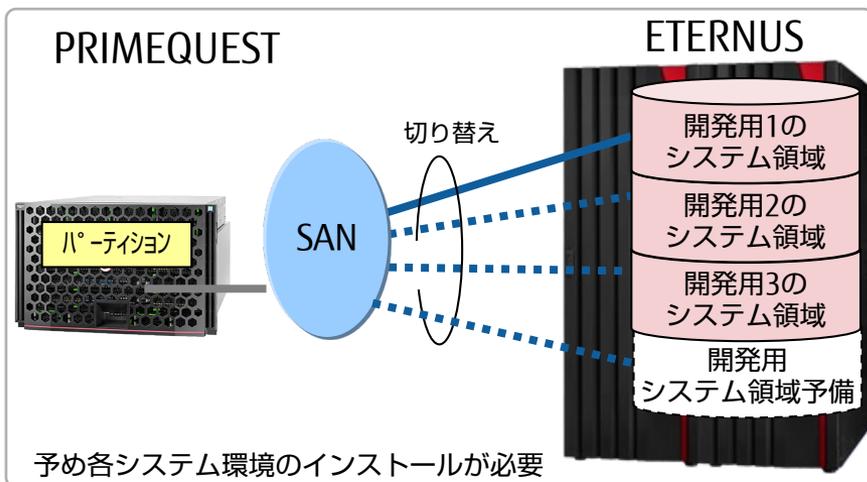
注)
ETERNUS DX S4/S3 series、ETERNUS AF series、ETERNUS DX200Fのファームウェアを更新した後に、サーバを再起動するとディスクの状態がオフラインとなる場合があります。詳細については、以下を参照ください

- 👉 『ETERNUS DX, ETERNUS AF 構築ガイド (サーバ接続編) ファイバチャネル/Windows®用』
- 👉 『ETERNUS DX 構築ガイド (サーバ接続編) FCoE/Windows®用』
- 👉 『ETERNUS DX, ETERNUS AF 構築ガイド (サーバ接続編) iSCSI/Windows®用』

2.3.3 SAN(FC/iSCSI/FCoE)ブート構成の特長(1/2)

■ SAN(FC/iSCSI/FCoE)ブート構成の特長

- 用途ごとのシステム領域をアレイディスク装置に用意、必要に応じて切り替える
 - ・ 必要な時に必要なシステムを切り替え利用可能(パーティションの有効活用が可能)



ETERNUS DX600 S4 諸元(一例)	
ドライブ種類	SAS, 自己暗号化SAS, ニアラインSAS, SSD, 自己暗号化SSD
最大ディスク容量	物理容量 16,220.16TB (1kByte=1,000Byte換算)
ハードウェア RAIDレベル	RAID 0, RAID 1, RAID 1+0, RAID 5, RAID 5+0, RAID 6
ETERNUS DX600 S4へ接続 諸元(FCブート構成例)	
FCカード	シングル/デュアルチャンネル 16Gbpsファイバーチャンネルカード
FCケーブル	ファイバーチャンネル用光ケーブル、Dual LCコネクタ

■ 全てのディスクを高機能、高信頼なアレイディスク装置で管理可能

- ・ 高信頼なETERNUS基盤設計(主要コンポーネント冗長化)
- ・ ETERNUSのアドバンスド・コピー機能により高速なバックアップ/リストアが可能
- ・ 柔軟な運用管理(RAIDグループ活性容量拡張、活性ボリューム再配置など、システム領域の切り替え運用)

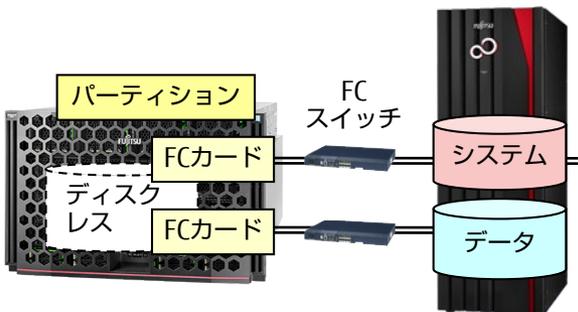
👉 SANブート構成については『SAN ブート環境構築マニュアル』を参照

2.3.3 SAN(FC/iSCSI/FCoE)ブート構成の特長(2/2)

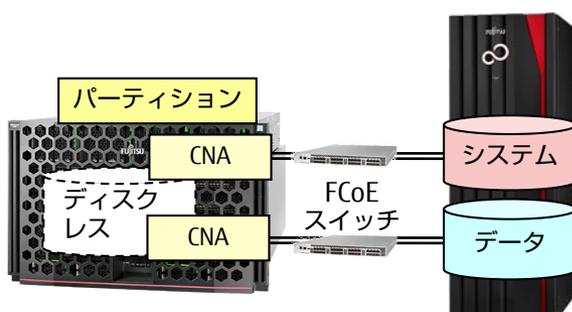
■ SAN(FC/iSCSI/FCoE)ブート構成に必要な機器

ブート形式	必要な機器
FCブート	<ul style="list-style-type: none"> FCカード(*1) FCスイッチ FCスイッチを必要としないPoint-to-Point接続も可能 一般的にはファブリック接続が可能なFCスイッチを利用する
iSCSIブート	<ul style="list-style-type: none"> CNA(*1)(*2) システム領域へのiSCSI接続にはIOUEまたはPCIボックス搭載のCNAを使用 FCoEスイッチ FCoEブート参照
FCoEブート	<ul style="list-style-type: none"> CNA(*1) FCoEスイッチ CEE/FCoEのプロトコルをサポートするストレージネットワーク機器(FCoEスイッチ)を使用 SANとLANの異なるトラフィックを単一ネットワーク上で転送することが可能となる

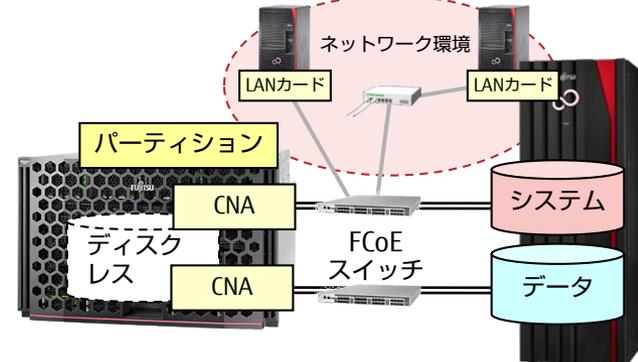
FCブート構成(*3)



iSCSIブート構成(*3)



FCoEブート構成(*3)



*1) 同一パーティション内でQLogic相当品のFCカードとEmulex相当品のFCカード / CNAは混在搭載不可

*2) PRIMEQUEST 3400S Lite / 3400S / 3400E / 3400L / 3800E / 3800LのWindows Server 2012 R2およびWindows Server 2016のみサポート

*3) ケーブル結線などは概念図である

2.4 ディスクの信頼性/アレイ機能の比較(1/2)

■ 機能種類と信頼性の比較

特徴	内蔵ディスク		外部アレイディスク装置
	M.2	HDD/SSD/PCIe SSD SFF	
機能種類	<ul style="list-style-type: none"> SB上に2本搭載可能 ブートデバイス専用として使用 SSD上で高速な処理が可能 	<ul style="list-style-type: none"> 整合性確保 (Make Data Consistent : MDC) コピーバック バックグラウンド初期化 パトロールリード ホットスペア/ホットスワップ ディスクのリビルド/リビルド率の選択 ハードディスク故障予測機能 (PFA/S.M.A.R.T.) フラッシュバックアップユニット TPMを利用したBitLockerドライブ暗号化 	左記内蔵ディスク機能に加えて、 <ul style="list-style-type: none"> オンライン中の高速バックアップ Disk to Disk to Tapeの統合バックアップ データベースと連携したデータ保護 RAIDマイグレーション LUNコンカチネーション データ・ブロックガード DBデータガード データ暗号化 PCIe SSDキャッシュ
信頼性	<ul style="list-style-type: none"> RAID 1構成による冗長化 Reserved SB不可(*1) 	<ul style="list-style-type: none"> RAIDレベルやディスク故障予兆機能など標準的な信頼性向上の機能を装備 ただし、RAIDコントローラの冗長化はソフトウェアRAIDを使用(非推奨) RAIDコントローラは活性交換できない 	<ul style="list-style-type: none"> 各種コンポーネントの二重化を実現し高い耐故障性を実現 主要な部品は活性交換が可能となっており、24時間無停止で運転可能
導入の容易さ	<ul style="list-style-type: none"> SB上に搭載するだけで利用可 	<ul style="list-style-type: none"> FC/スイッチ等の設計が不要な分だけ導入が容易 	<ul style="list-style-type: none"> ETERNUS装置を使うための設計が必要

*1) M.2導入時の注意点は「[3.3 M.2/HDD/SSD搭載コンポーネントの選択](#)」を参照

本ページは一般的な特徴を記載しているため、機能の対応可否については、内蔵ディスクや外部アレイディスク装置のカタログやマニュアルを参照

ETERNUS機能については『富士通ホームページ<https://www.fujitsu.com/jp/products/computing/storage/disk/>』を参照

M.2、内蔵ディスク機能については『マニュアルサイト<http://manuals.ts.fujitsu.com/index.php?id=5406-5528-5529-5558>』から『LSI MegaRAID SAS Software』を参照

RAIDレベルは富士通ホームページ『ストレージ構築ガイド http://jp.fujitsu.com/platform/server/primergy/hdd_construct/』を参照

2.4 ディスクの信頼性/アレイ機能の比較(2/2)

■ ディスク信頼性とハードウェアRAID機能の比較

■ システム/データ領域ともにハードウェアRAIDによるディスク冗長化を推奨

項目	内蔵ディスク		外部アレイディスク装置
	M.2	HDD/SSD/PCIe SSD SFF	
RAIDレベル(*1)	0, 1	0, 1, 5, 6, 10, 1E	0, 1, 1+0, 5, 5+0, 6, 6-FR
冗長化したディスクの拡張	なし (搭載上限は2枚)	RAIDカードの容量拡張機能により可能(*2)	LUNコンカチネーション機能により可能
HDD故障検出	<ul style="list-style-type: none"> MMB Web-UIでハードディスク異常表示 	<ul style="list-style-type: none"> ディスクドライブの故障の予兆を検出すると自動的にホットスペアにコピー開始 ServerView RAID Managerがイベントログへ異常を出力 MMB Web-UIでハードディスク異常表示 	<ul style="list-style-type: none"> ディスクドライブの故障の予兆を検出すると自動的にホットスペアにコピー開始 ETERNUSがEmail通知とログファイルへ異常を出力 MMB Web-UIでハードディスク異常表示 データブロックにチェックコードを付加してデータの整合性を確認(ブロックガード機能)
ホットスワップ/ホットスペア	不可	可能(*3)	

【重要】

• Windows標準機能である、ソフトウェアRAID(ダイナミックディスク/ボリューム)によるディスク冗長化は可能だが、**ソフトウェアRAIDは次の理由により推奨しない**

- ①復旧手順が煩雑で、必ず事前検証が必要
- ②CPU使用率がハードウェアRAIDよりも高くなる

• PRIMEQUEST3000シリーズは記憶域スペース、および、記憶域スペースダイレクトをサポートしない

*1) システム領域でRAID 0は非推奨

*2) RAID 1E および RAID 10は除く

*3) RAID 0は除く

2.5 ディスク容量見積もり

■ 搭載したメモリサイズを目安に見積もることがポイント

■ 大容量メモリを搭載する場合はディスク容量も大容量になる

例) Windows Server 2016で、搭載メモリを64GB、
ダンプファイルとページングファイルの格納先をシステム領域とした場合の
システム領域見積もり

用途	目安	見積もり
ダンプファイル用	搭載メモリ+300MB	65GB
ページングファイル用	搭載メモリ+300MB	65GB
OS用(修正プログラム含む)	OSに必要な最小限のディスク容量 +修正プログラム	35GB(*1)
アプリケーションや一時ファイル用	お客様環境に依存	5GB
	合計(*2)	165GB

*1) OSに必要な最小限のディスク容量を15GB(Windowsをインストールした直後のディスク使用量を基準)とし、
修正プログラム適用に必要な容量を20GB(Service Packを2回程度)と想定して算出

*2) 見積もりの合計値がディスク容量を超えた場合は、『大容量メモリダンプファイル設計ガイド』を参照して
ダンプファイルやページングファイルの設置場所を別のディスクに設定する

完全メモリダンプおよび完全メモリダンプ作成のためのページングファイルの格納先により、
ディスク容量見積もりは大きく異なる。詳細は『大容量メモリダンプファイル設計ガイド』を参照

■ メモリダンプの種類

 メモリダンプの違いなど詳細は『大容量メモリダンプファイル設計ガイド』を参照

■ 完全メモリダンプ

原因追求を重視する場合に選択する

- システムが停止したときの物理メモリの内容をすべて記録するため、ディスク空き容量が多く必要
- 業務を再開するまでの停止時間が長くなる
- 採取された大容量のダンプファイルをSupportDeskへ送付するための手順や方法を検討しておく

■ カーネルメモリダンプ

業務の復旧を優先する場合に選択する

- 物理メモリ上に割り当てられたカーネルメモリ空間のみの情報を記録
- 業務アプリを含めたシステム全体のハングやスローダウンなどは、「完全メモリダンプ」でないとトラブルの原因を特定できない場合がある

■ 最小メモリダンプ

最小限の情報が記録され、128KBまたは256KBのサイズでダンプファイルが作成される

■ メモリダンプの種類

■ 自動メモリダンプ(Windows Server 2012以降の機能)

Windows Server 2019/2016/2012R2では既定で設定されている

- カーネルメモリダンプ同様に、物理メモリ上に割り当てられたカーネルメモリ空間のみの情報を記録
- カーネルメモリダンプとの違いは、ページングファイルの初期値が小さいサイズに作成可能
カーネルメモリ空間の容量に対してページングファイルサイズが小さい場合は、カーネルメモリダンプは失敗するが、次回起動時にページングファイルのサイズが自動で拡張される
- メモリダンプの記録が失敗する可能性があるため非推奨

■ アクティブメモリダンプ(Windows Server 2016以降の機能)

仮想環境を有する物理環境において、ディスク使用量を抑えつつ、完全メモリダンプと同等の情報を取得したい場合に選択する

- 採取対象のOSが使用しているメモリ領域(アクティブ領域)のみの情報を記録する。
例えば、物理環境のメモリダンプを採取する場合、仮想環境が使用しているメモリ領域は採取しない

2.5.1 メモリダンプの種類とファイルサイズ(3/3)

運用開始前に実際に強制ダンプを採取して、ダンプ生成時間による業務停止時間を計測して下さい(*1)

メモリダンプの種類	メモリダンプファイルサイズ(*2)	記録方法
完全メモリダンプ	搭載物理メモリサイズ+300MB(*3)	上書き(*4)
カーネルメモリダンプ	OS稼動時のメモリ空間に依存 (32ビット版Windowsは最大2GB) (64ビット版Windowsは最大8TB)	上書き(*4)
最小メモリダンプ	32ビット版Windowsは128KB 64ビット版Windowsは256KB	新規ファイル作成
自動メモリダンプ	OS稼動時のメモリ空間に依存 (最大8TB)	上書き(*4)
アクティブメモリダンプ	採取対象のOSが使用しているメモリ領域に依存 (最大で搭載物理メモリサイズ+300MB(*3))	上書き(*4)

- *1) Watchdog監視機能により、ダンプ採取中にサーバが再起動する場合があります。
ダンプ採取中にサーバが再起動するとダンプファイル作成に失敗するため、回避する手段として、下記いずれかの対応を推奨する。
- ・ Watchdogを [Disable(デフォルト)]に設定したうえでダンプを採取
『運用管理マニュアル』参照
 - ・ 時間を要する[完全メモリダンプ]ではなく、[カーネルメモリダンプ]を採取
- *2) ダンプファイルの保存先がSAN ストレージ装置か内蔵ディスクかに関わらず生成されるダンプファイルサイズに差はない。
- *3) Memory Mirror機能 利用時は、搭載している物理メモリサイズの半分のサイズ+300MBとなる。
- *4) 既定では、既存のファイルを上書きする。設定画面上で上書き設定のチェックボックスを外すと、ダンプファイルを上書きはしない。ただし、すでにメモリダンプファイルが存在する場合、新たなメモリダンプファイルを作成できない。新たなメモリダンプファイルを作成するには、既存のメモリダンプファイルを退避する必要がある。

2.6 ディスク形式の選択

■ システム領域とデータ領域のディスク形式を選択する

領域	選択可能なディスク形式
システム	MBR形式/GPT形式
データ	

 ディスク形式の詳細は『1.1 ディスク用語の説明(2/3)』の項を参照

■ ディスク形式の選択目安

- 2TB以上のディスクボリュームを扱う場合はGPT形式とする
例) 搭載物理メモリサイズが2TB以上で完全メモリダンプファイルを採取する場合
- 使用するバックアップソフトウェアが対応したディスク形式とする

3. 内蔵ディスクブートに必要な設計

内蔵ディスクブート環境の設計に必要な作業を説明します

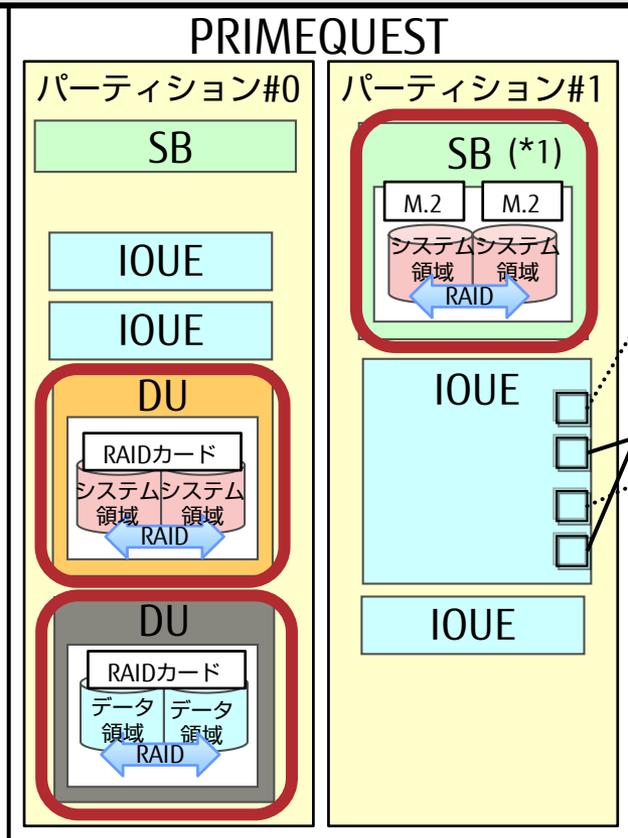
3.1 内蔵ディスクブート環境の設計概要

■ 内蔵ディスクブート環境では次の設計を行う

- ②および③は、データ領域を外部アレイドスク装置に配置する場合のみ必要

①内蔵ディスク搭載コンポーネントの選択

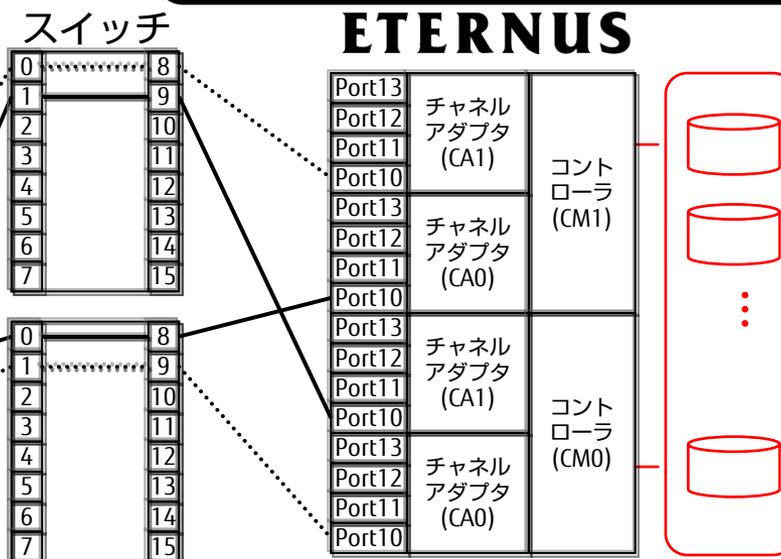
- システム領域を格納する内蔵ディスクの搭載コンポーネントを選択



*1) M.2 を搭載

② 外部アレイドスク装置側の設計

- ディスク領域の確保
- 論理ユニットの領域をCA(チャンネルアダプタ)に割り当て

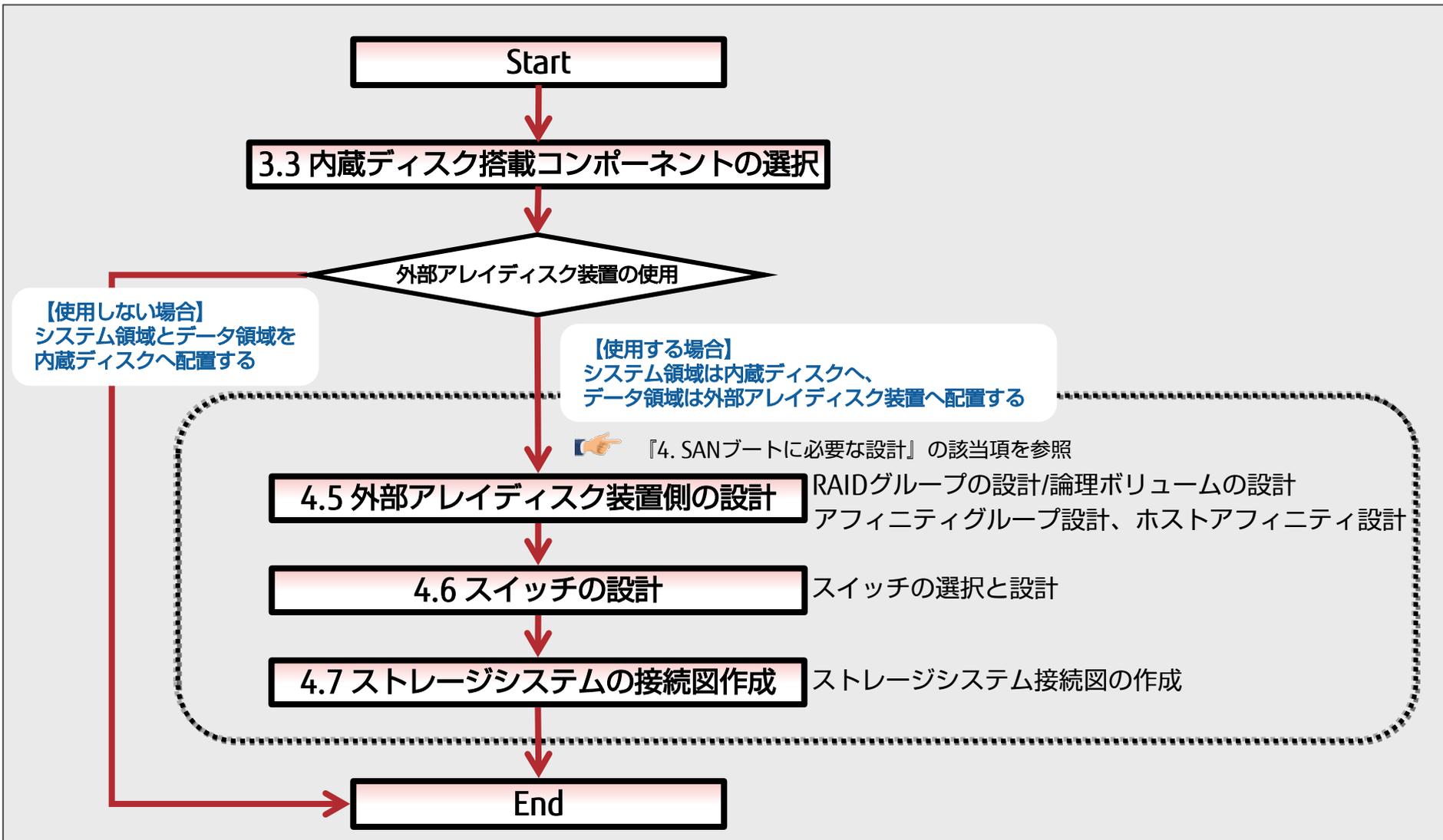


③ スイッチの設計

- スイッチの基本設定 (IPアドレス/サブネットマスク/ゲートウェイなど)

システム領域を内蔵ディスクに構築

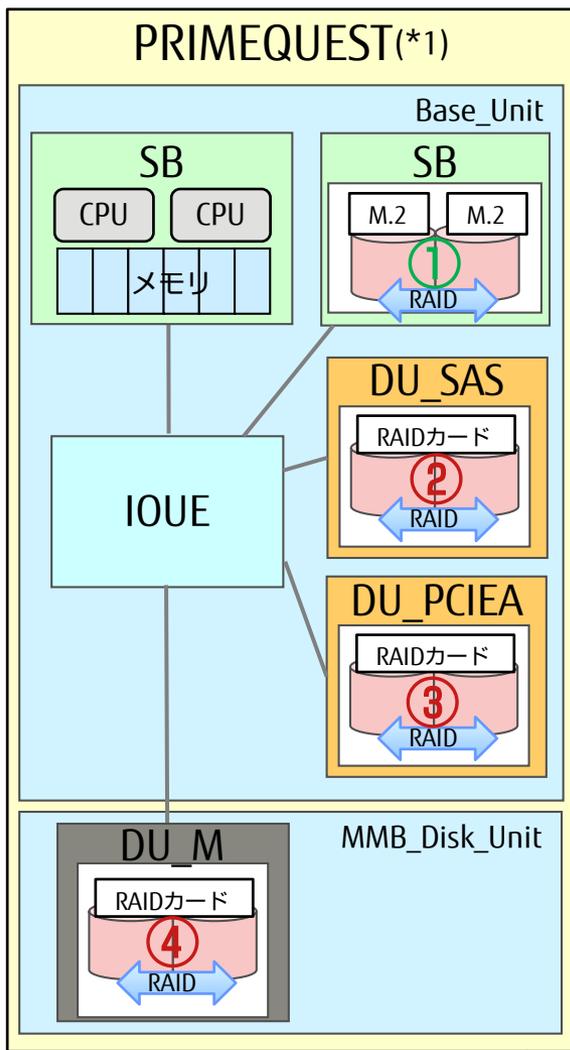
■ 内蔵ディスクブート環境は次の手順で設計する



3.3 内蔵ディスク搭載コンポーネントの選択(1/3)

■ システム領域のディスク形式を選択する

■ 筐体に搭載可能なM.2/HDD/SSD/PCIe SSD SFFの各コンポーネントは、いずれもシステム領域としての利用可能。M.2はブート専用設計されている



搭載位置	コンポーネント	RAIDレベル	説明
①	M.2	0/1	<ul style="list-style-type: none"> ・SB上にあるM.2(M.2規格のブート専用ストレージデバイス)搭載用のスロット ・M.2を2本搭載可能 ・SB上にシステム領域を構築するため、その分データ領域用ストレージを多く確保可能
②	DU_SAS(*2)	0/1/5/6/10/1E	<ul style="list-style-type: none"> ・HDD/SSD搭載用のユニット ・DU_SASをシステム領域として利用する場合、DU_Mをデータ領域として利用 ・2.5インチのHDD/SSDスロットを合計4本搭載 ・Base_Unitに搭載
③	DU_PCIEA(*2)	0/1/5/6/10/1E	<ul style="list-style-type: none"> ・PCIe SSD SFF搭載用のユニット ・システム領域として利用できる内蔵ディスクの中で最も高速 ・2.5インチPCIe SSD SFFスロットを合計4本搭載 ・Base_Unitに搭載
④	DU_M(*2)	0/1/5/6/10/1E	<ul style="list-style-type: none"> ・DU_SASと同等の機能をもつ ・2.5インチのHDD/SSDスロットを合計4本搭載 ・MMB_Disk_Unitに搭載

*1) 搭載可能なコンポーネントの数はPRIMEQUEST機種によって異なる。『製品概説』を参照
 *2) 1DUにつき、RAIDカードが1枚必要

☞ 内蔵HDD/SSDの特長はマニュアル『製品概説』の「2章 ハードウェアの構成」を参照

■ M.2搭載時の注意点

以下を考慮して搭載コンポーネントを選択する

■ Reserved SB不可

- ・ M.2を使用しているパーティションに対して、Reserved SBは設定不可

■ 有寿命部品

- ・ 書き込み寿命を有するNANDフラッシュを含んだ「有寿命部品」は、使用方法により保証期間内またはSupportDesk契約期間内にNANDフラッシュの書き込み寿命を迎える場合がある

 詳細は「システム構成図」を参照

■ 活性交換非対応

- ・ M.2を交換する場合はパーティションの停止が必要

■ 小容量

- ・ 1SBあたりの最大搭載数が150GB 2本と少なくシステム領域のひっ迫が生じやすいため、ページファイルなどの格納場所としてデータ領域を指定する

■ RAID構成時の設定

- ・ OSインストール前に、BIOSの設定で明示的にSATA Modeを切り替えておく必要がある
[Configuration]-[SATA Configuration]-[SATA Mode]を「RAID」へ変更

■ UEFI時のみサポート

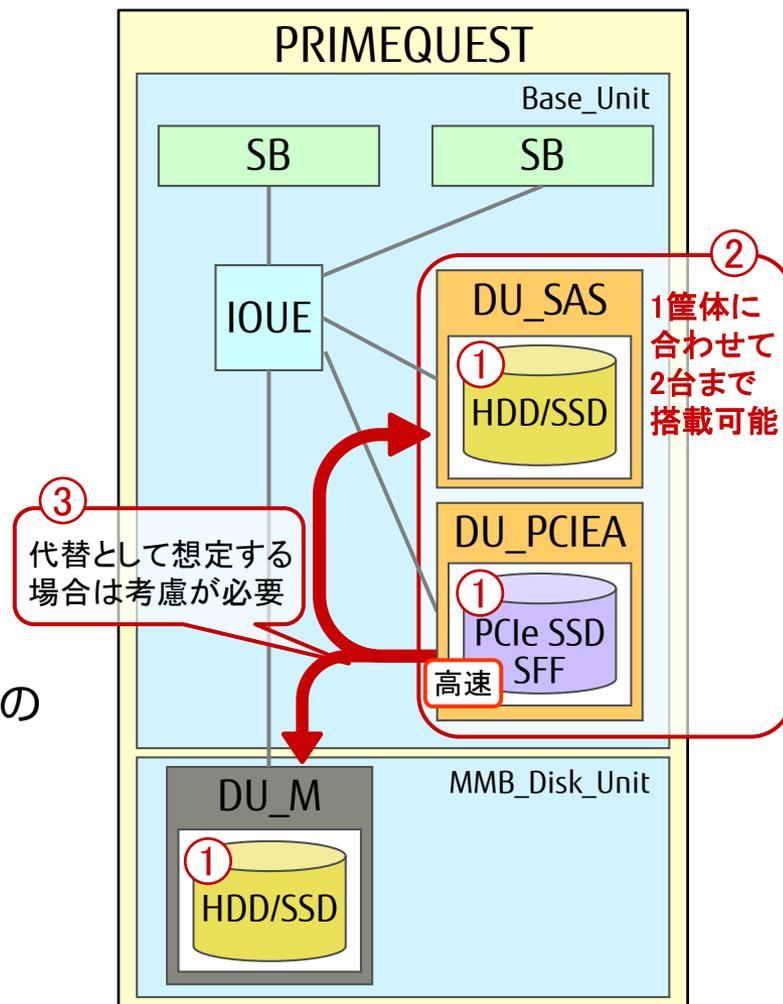
- ・ M.2の使用時はブートオプションでUEFIを選択

■ DU搭載時の注意点

以下を考慮して搭載コンポーネントを選択する

- ① DUに搭載可能な内蔵ディスクについて
 - ・ DU_SAS/DU_MにはHDD/SSDのみ搭載可能
 - ・ DU_PCIEAにはPCIe SSD SFFのみ搭載可能
- ② DU_SASとDU_PCIEAの混載について
 - ・ 1筐体(Base_Unit)に、DU_SASとDU_PCIEAを合わせて2台まで搭載可能
- ③ DU_PCIEAの代替としてDU_SAS/DU_Mを想定する場合の考慮点
 - ・ DU_PCIEAに搭載するPCIe SSD SFFはDU_SAS/DU_Mに搭載するHDD/SSDよりも高性能である。
 - そのため、DU_PCIEAが使用不可となったさいの代替としてDU_SAS/DU_Mを想定する場合は性能低下を考慮する必要がある

DUの諸元は『システム構成図』を参照



4. SANブートに必要な設計

SANブート環境の設計に必要な作業を説明します
ブート形式(FCブート、iSCSIブート、FCoEブート)それぞれに
対応する記事にアイコンを付けています

-  FCブートに対応する記事を示すアイコン
-  FCoEブートに対応する記事を示すアイコン
-  iSCSIブートに対応する記事を示すアイコン

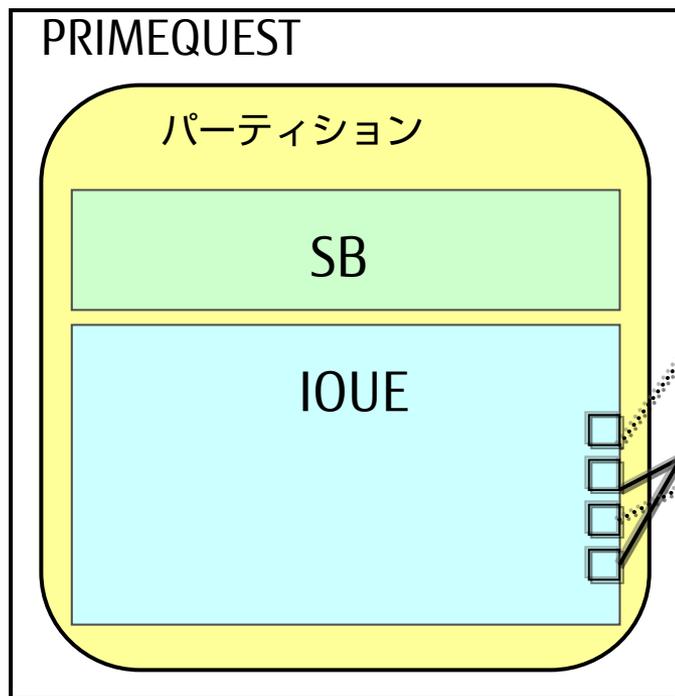
4.1 SANブート環境の設計概要



■ SANブート環境では次の設計を行う

① ブートパス/データパスの設計

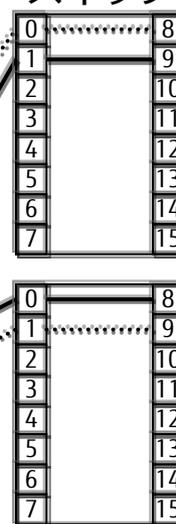
- PRIMEQUESTと外部アレイドスク装置の接続パス設計



② 外部アレイドスク装置側の設計

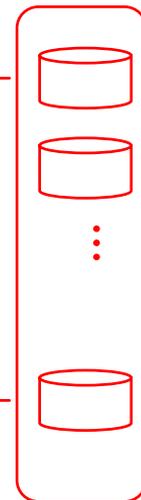
- ディスク領域の確保
- 論理ユニットの領域をCA(チャンネルアダプタ)に割り当て

スイッチ



ETERNUS

Port13	チャンネルアダプタ (CA1)	コントローラ (CM1)
Port12	チャンネルアダプタ (CA1)	
Port11	チャンネルアダプタ (CA1)	
Port10	チャンネルアダプタ (CA0)	コントローラ (CM0)
Port13	チャンネルアダプタ (CA0)	
Port12	チャンネルアダプタ (CA0)	
Port11	チャンネルアダプタ (CA1)	コントローラ (CM0)
Port10	チャンネルアダプタ (CA1)	
Port13	チャンネルアダプタ (CA0)	
Port12	チャンネルアダプタ (CA0)	コントローラ (CM0)
Port11	チャンネルアダプタ (CA0)	
Port10	チャンネルアダプタ (CA0)	



③ スイッチの設計

【FC/FCoEブートの場合】

- 基本設計とゾーニング設計(IPアドレス/ゲートウェイ/ゾーニングなど)

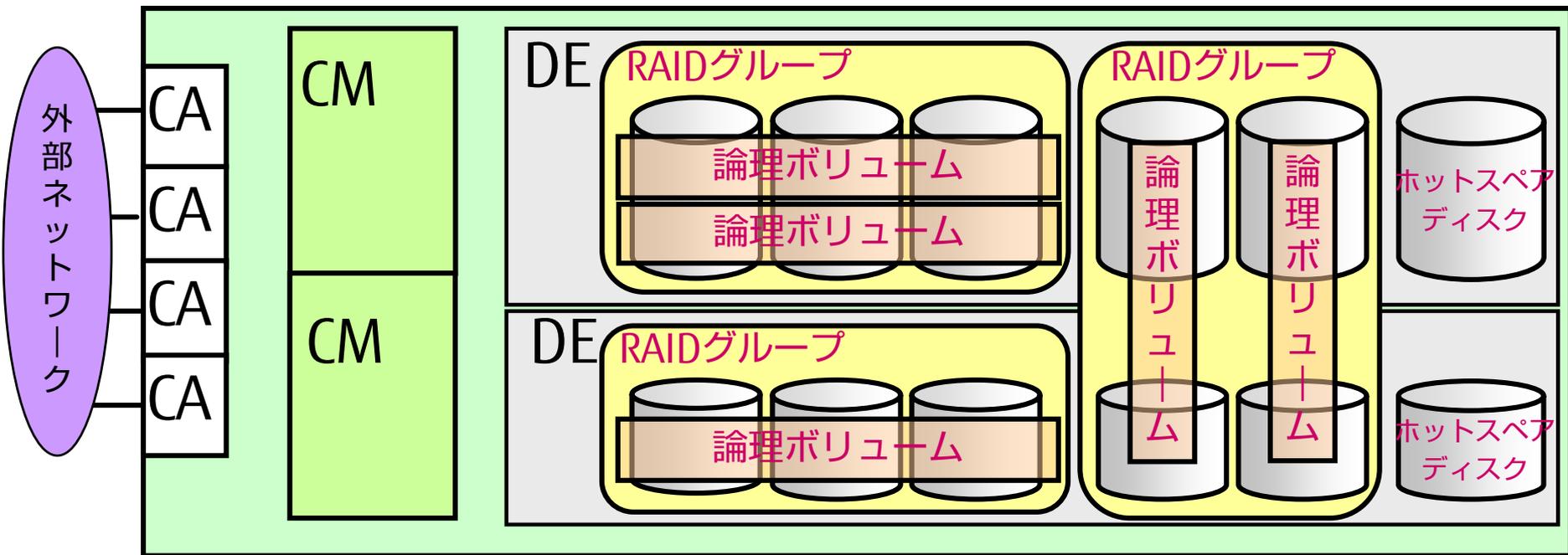
【iSCSIブートの場合】

- 基本設計とVLAN設計

【参考】ストレージの用語について

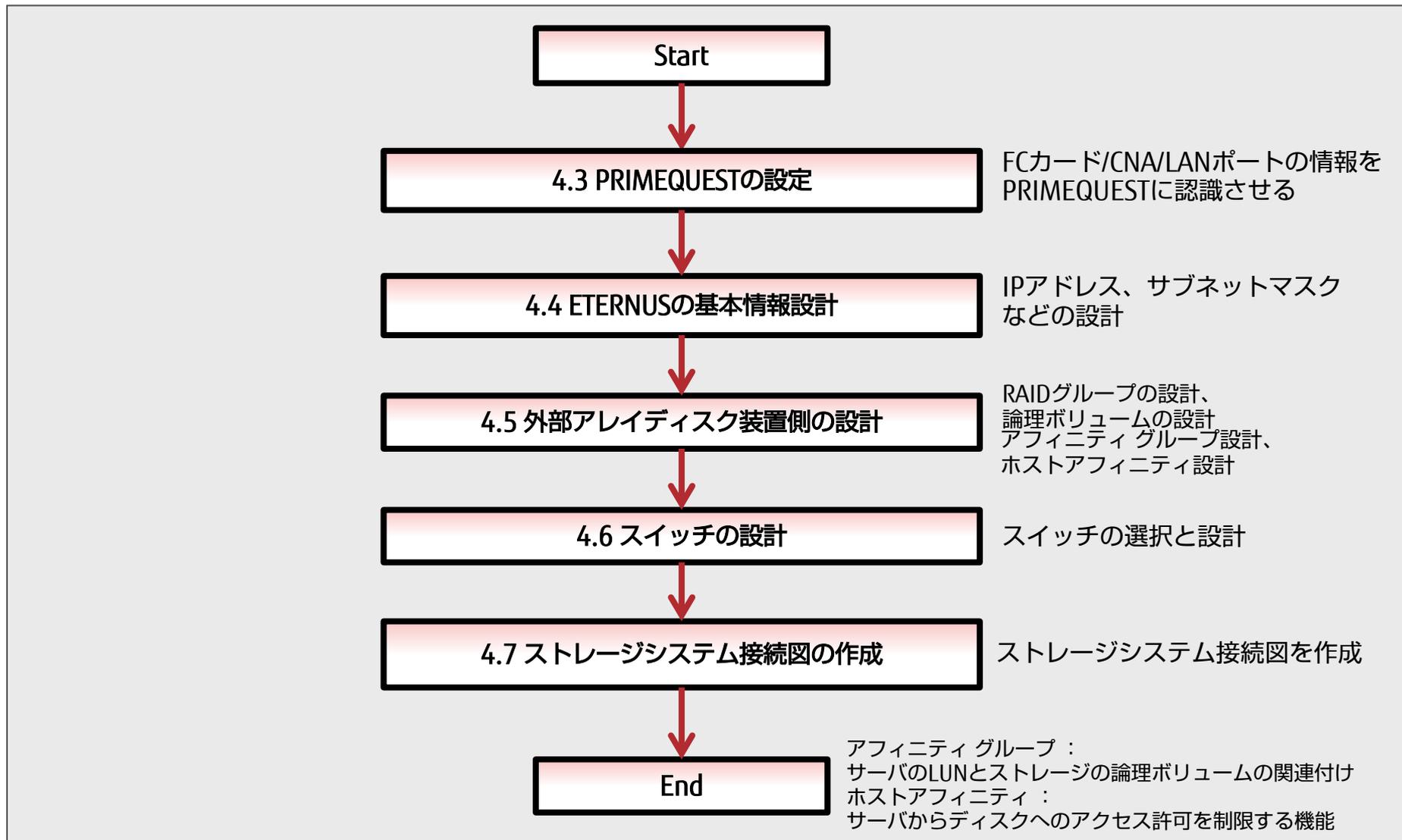


《ストレージ構成要素》



用語	説明
CA (チャネルアダプター)	サーバとの接続を制御するアレイディスクのモジュール
CM (コントローラーモジュール)	ETERNUS内のすべての動作を制御するモジュール
DE (ドライブエンクロージャ)	HDDを搭載するユニット
RAIDグループ	RAIDを構成するディスクの集まり
論理ボリューム	サーバのOS上で使用するディスクの単位
ホットスペアディスク	RAIDを構成するディスクが壊れた場合のスペアディスク

■ SANブート環境は次の手順で設計する



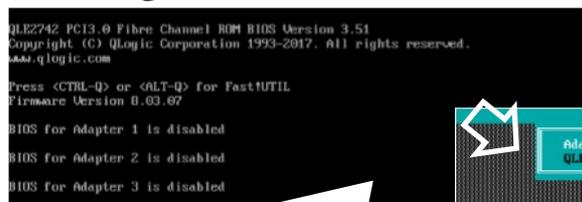
4.3 PRIMEQUESTの設定(1/4)

■ QLogic相当品 FCカードでFCブートを設定する場合

FCカード情報をPRIMEQUESTに認識させる

■ FCカードを認識させる設定ツールはブートオプションにより異なる

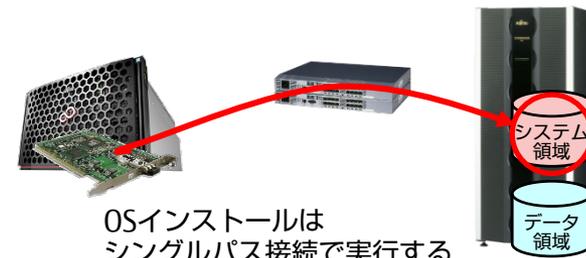
- ・ Legacyの場合
[QLogic Fast!UTIL]を使用する



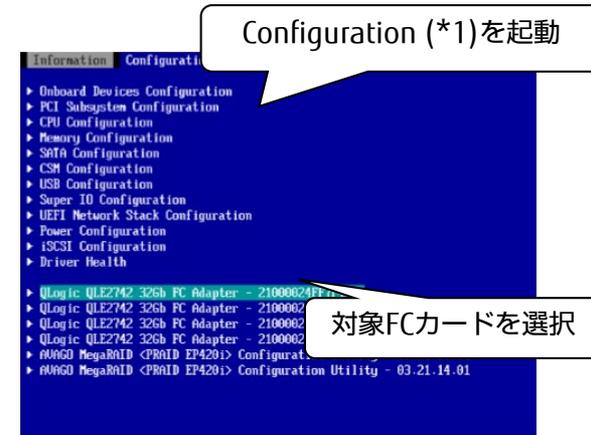
システムの起動中に、QLogic BIOS のメッセージが表示されたら <Alt> + <Q> または <Ctrl> + <Q> を押下



- ・ UEFIの場合
[Configuration]で対象FCカードを選択



(*1) 起動画面はファームウェア版数により異なります



詳細については『SAN ブート環境構築マニュアル』を参照

4.3 PRIMEQUESTの設定(2/4)

■ Emulex相当品 FCカードでFCブートを設定する場合

FCカード情報をPRIMEQUESTに認識させる

■ FCカードを認識させる設定ツールはブートオプションにより異なる

・ Legacyの場合

[Emulex LightPulse FC BIOS Utility]を使用する



```
Emulex LightPulse FC x86 BIOS, Version 11.2.210.8
Copyright (c) 1996-2016 Avago Technologies. All rights reserved.

Press <Alt>E or <Ctrl>E to enter Emulex BIOS configuration
utility. Press <S> to skip Emulex BIOS
Emulex BIOS is Disabled on Adapter 02
Emulex BIOS is Disabled on Adapter 03
Emulex BIOS is Disabled on Adapter 04
Installing Emulex BIOS .....
Bringing the Link up. Please wait.
```

システムの起動中に、Emulex BIOS のメッセージが表示されたら <Alt> + <E> または <Ctrl> + <E> を押下

```
Emulex LightPulse FC BIOS Utility, RC 11.2.210.8
Port: LPe32002-M2: Bus#: 49 Dev#: 00 Func#: 00 Boot BIOS: Disabled
Mem Base: 000000000D300000 Firmware Version: 11.2.210.8
Port Name: 10000090FAF0B405 Node Name: 20000090FAF0B405
Link Status: Link Down

Enable/Disable Boot from SAN
Scan for Target Devices

Enter <Esc> to Previous Menu
<F1> to Highlight, <Enter> to Select

Copyright (c) 1996-2016 Avago Technologies. All rights reserved.
```

Emulex LightPulse FC BIOS Utility(*1) 起動

(*1) 起動画面はファームウェア版数により異なります

・ UEFIの場合

[Configuration]で対象FCカードを選択

```
Information Configuration Management
> Onboard Devices Configuration
> PCI Subsystem Configuration
> CPU Configuration
> Memory Configuration
> SATA Configuration
> CSM Configuration
> USB Configuration
> Super IO Configuration
> UEFI Network Stack Configuration
> Power Configuration
> iSCSI Configuration
> Driver Health

Emulex LightPulse LPe32002-M2 2-Port 32Gb Fibre Ch - FC
Emulex LightPulse LPe32002-M2 2-Port 32Gb Fibre Ch - FC
Emulex LightPulse LPe32002-M2 2-Port 32Gb Fibre Ch - FC
Emulex LightPulse LPe32002-M2 2-Port 32Gb Fibre Ch - FC
AWARD MegaRAID (PRAID EP420) Configuration Utility - 03.21.14.01
AWARD MegaRAID (PRAID EP420) Configuration Utility
```

Device Manager(*1)を起動

対象FCカードを選択

👉 詳細については『SAN ブート環境構築マニュアル』を参照

4.3 PRIMEQUESTの設定(3/4)

■ CNAでFCoEブートを設定する場合

CNA情報をPRIMEQUESTに認識させる

■ PXESelect Utility(*1)でPersonalityをFCoEに設定する

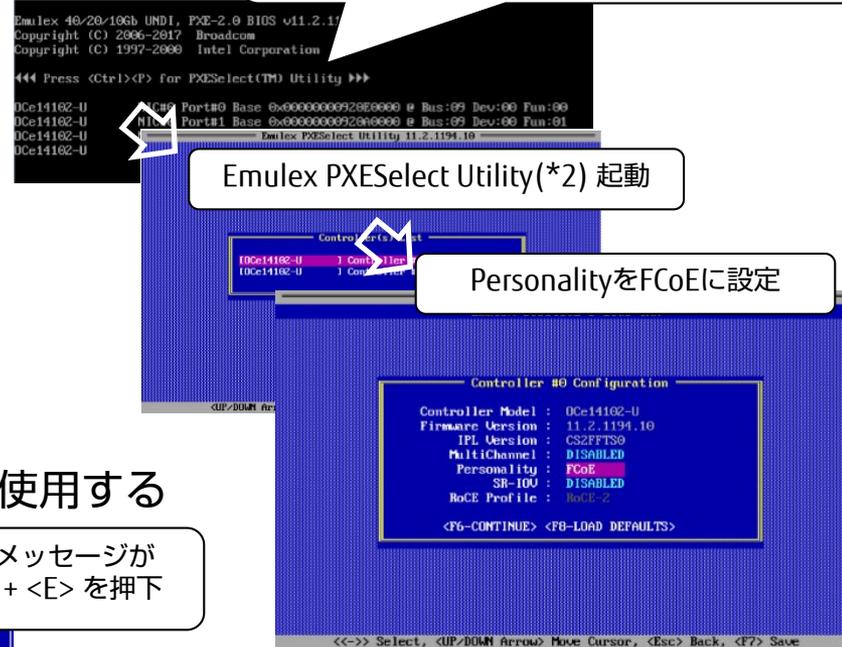
*1) UEFIで使用する場合、一旦ブートオプションをLegacyに設定後、本Utilityを起動する

■ CNAを認識させる設定ツールはブートオプションにより異なる

・ Legacyの場合

[Emulex OneConnect FCoE BIOS Utility]を使用する

システムの起動中に PXESelect Utility のメッセージが表示されたら <Ctrl> + <P> を押下



システムの起動中に、Emulex BIOS のメッセージが表示されたら<Alt> + <E>または<Ctrl> + <E> を押下



・ UEFIの場合

[Configuration]で対象CNAを選択

*2) 起動画面はファームウェア版数により異なります

👉 詳細については『FCoE ブート環境構築マニュアル』を参照

4.3 PRIMEQUESTの設定(4/4)

■ CNAでiSCSIブートを設定する場合(*1)

*1) PRIMEQUEST 3400S Lite / 3400S / 3400E / 3400L / 3800E / 3800LのWindows Server 2012 R2 およびWindows Server 2016のみサポート

CNA情報をPRIMEQUESTに認識させる

■ PXESelect Utility(*2)でPersonalityをiSCSIに設定する

*2) UEFIで使用する場合、一旦ブートオプションをLegacyに設定後、本Utilityを起動する

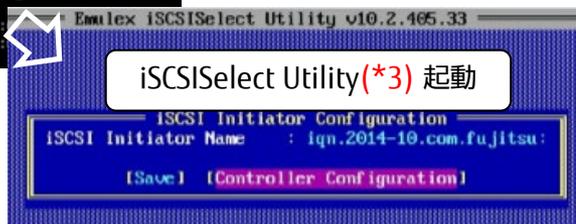
■ CNAを認識させる設定ツールはブートオプションにより異なる

・ Legacyの場合
[iSCSISelect Utility]を使用する

システムの起動中に、iSCSI initiator BIOS のメッセージが表示されたら、<Ctrl> + <S> を押下



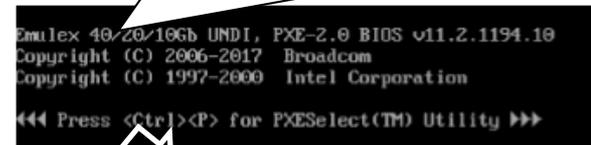
iSCSISelect Utility(*3) 起動



・ UEFIの場合
[Configuration]で対象CNAを選択

*3) 起動画面はファームウェア版数により異なります

システムの起動中にPXESelect Utilityのメッセージが表示されたら<Ctrl> + <P> を押下



PersonalityをiSCSIに設定

■ ETERNUSの基本情報を設計する

- 設計値はETERNUS Web GUI でETERNUSに登録

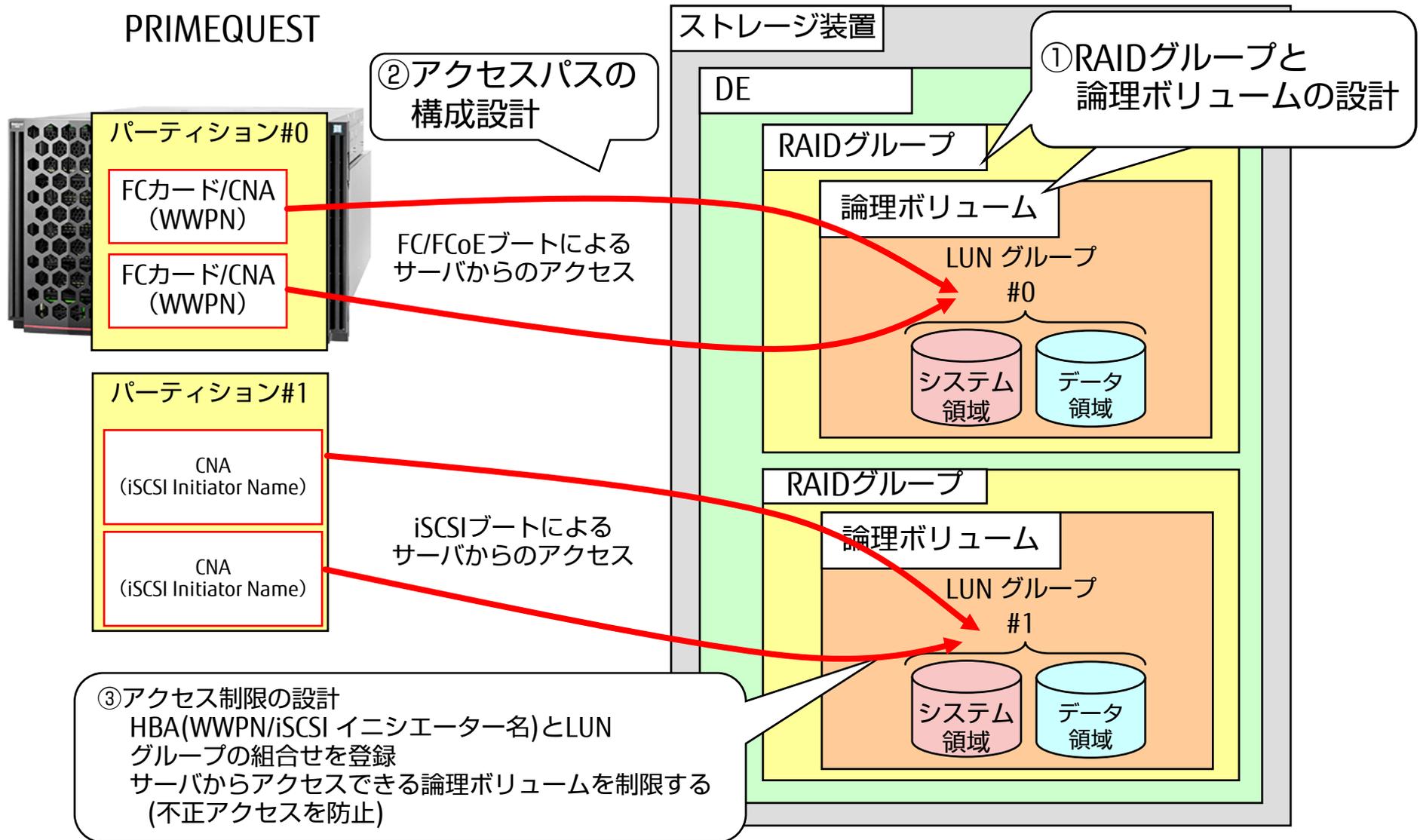
設計項目	説明
IPアドレス	ETERNUS本体に設定するIPアドレス
サブネットマスク	ETERNUS本体に設定するサブネットマスク
ゲートウェイアドレス	ETERNUS本体に設定するゲートウェイアドレス
同一サブネットからのアクセス	許可するか許可しないかの設計
Rootパスワード	ETERNUS Web GUIにログインするさいのパスワード
優先DNSサーバ	存在する場合に設計
代替DNSサーバ	存在する場合に設計

【参考】 ETERNUS Web GUIでの設定/確認方法

- 同一ネットワーク上のPCブラウザより下記URLを入力し、ETERNUS Web GUIにログイン

<http://ETERNUSのIPアドレス/> または <https://ETERNUSのIPアドレス/>

■ ディスクの領域設計とディスクへのアクセス制限を設計する

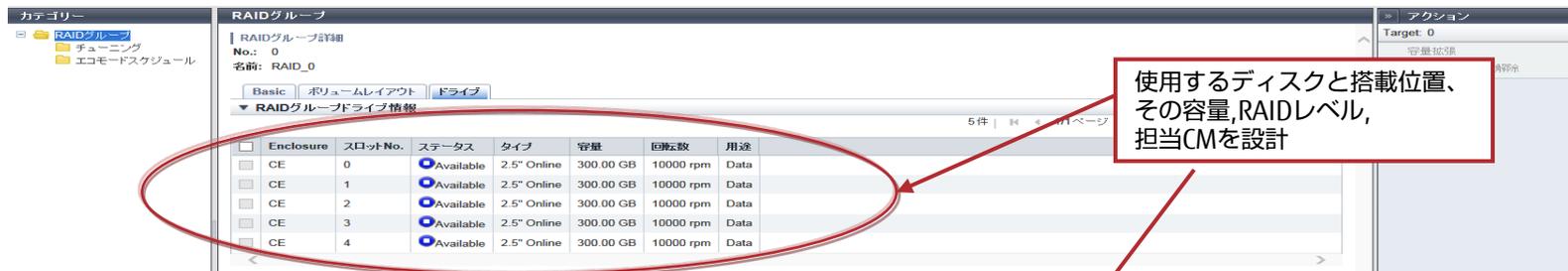


4.5.1 RAIDグループ設計(1/2)

■ RAIDグループのディスク容量、RAIDレベル、担当CMを設計する

設計項目	説明
RAID Group番号	RAIDグループの番号(10進数で設計)
RAID Group名	RAIDグループ名を1~16文字の半角英数字記号
担当CM	RAIDグループの担当CM
RAIDレベル	RAIDレベルと、構成するディスクドライブ数
ディスクドライブ種類	ディスクドライブの種類

ETERNUS Web GUIの「RAID Group」の[RAIDグループドライブ情報]画面



<RAIDグループ構成表(例)>

No.	RAID名	RAIDレベル	Data+M/P	ドライブ種別	ドライブ選択	担当CM
0	RAID_0	RAID5	4+1	SAS	2.5" 3.84TB	CM#0
1	RAID_1	RAID5	4+1	Nearline	2.5" 1TB/7.2krpm	CM#1
2	RAID_2	RAID1+0	4+4	SSD	2.5" 800GB	CM#0

なお、設定方法の詳細につきましては、ETERNUS各モデルの

『ETERNUS Web GUI ユーザーズガイド（設定編）』を参照ください。

■ システム領域とデータ領域のRAIDグループ設計

- システム領域とデータ領域のRAIDグループは分けることを推奨
- システム領域の担当CMとデータ領域の担当CMは分けることを推奨

(ただし、負荷状況を性能テストや異常系テストで評価し、一部のデータ領域のRAIDグループの担当CMをシステム領域の担当CMと共用させるなど、CM間の負荷調整は必要)

[理由]

- ・ システム領域には定常的なアクセスが発生するため

<アクセス例>

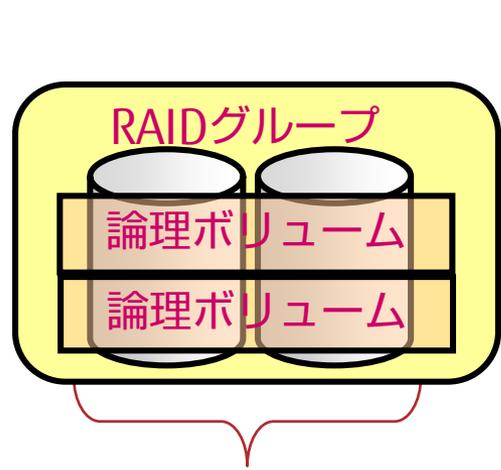
- ・ ページングファイルへのアクセス
- ・ アプリケーションなどの実行によるシステムライブラリのロード
- ・ メッセージなどのログ出力
- ・ FCパス帯域、CM負荷、コントローラ性能などの要因でアクセス待ちが発生するため

4.5.2 論理ボリュームの設計

■ 各RAIDグループ内の論理ボリュームを設計する

設計項目	説明
RAIDグループ名と番号	論理ボリュームを設定するRAIDグループの名前
論理ボリューム番号	論理ボリューム番号を10進数で設計
ボリューム容量	論理ボリュームの容量
Type	Standard / Wide Striping Volume / Thin Provisioning Volume / Snap Data Volume / Snap Data Pool Volumeから選択 Windowsサーバでは通常はStandardを選択

例) RAIDグループ RAID_0 RAID 1(1+1)の場合



RAIDグループ内に構成する
論理ボリュームを設計

<ボリュームセット構成表(例)>

LUN #	所属RAID名	No.	名前	連結順	タイプ	ボリューム容量	単位
LUN #0001	RAID_0	0000	test00	-	Standard	200GB	
LUN #0002	RAID_0	0001	test01	-	Standard	300GB	
	RAID_1	0002	test10	-	Standard	300GB	
	RAID_1	0003	teat11	-	Standard	200GB	

RAID 1 (1+1)

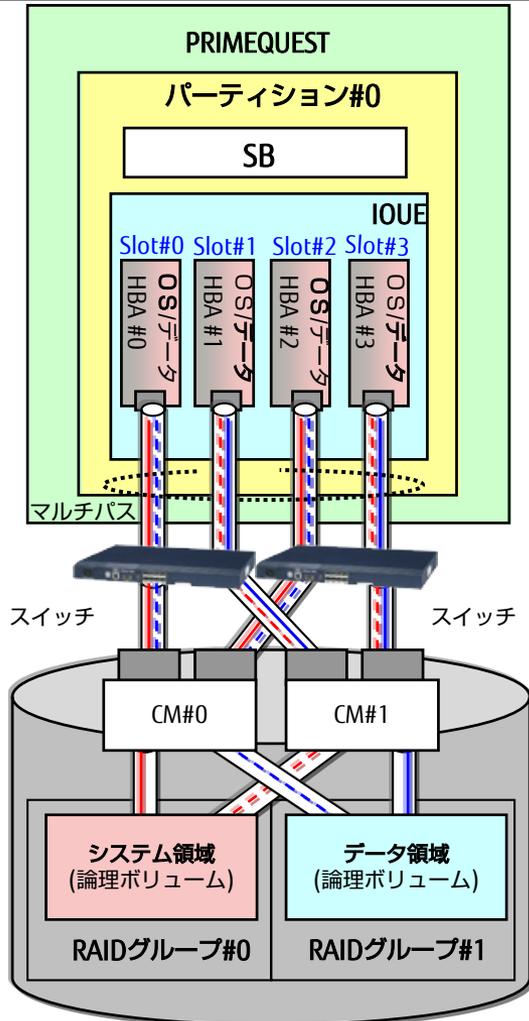
- ロードバランスやHBA異常時の性能影響などを考慮し、アクセスパス構成を設計する

以下の代表的な構成パターンについて説明する

- a. 4ポートの構成例(FCパス)
シングルチャネルカード4枚使用
- b. 2ポートの構成例(FC/iSCSIパス)
シングルチャネルカード2枚
- c. 4ポートの構成例(FC/FCoE /iSCSIパス)
デュアルチャネルカード2枚使用

4.5.3 アクセスパスの設計(2/5)

a. 4ポートの構成例



- ブートパス (実線 : Active 破線 : Standby)
- データパス (実線 : Active 破線 : Standby)

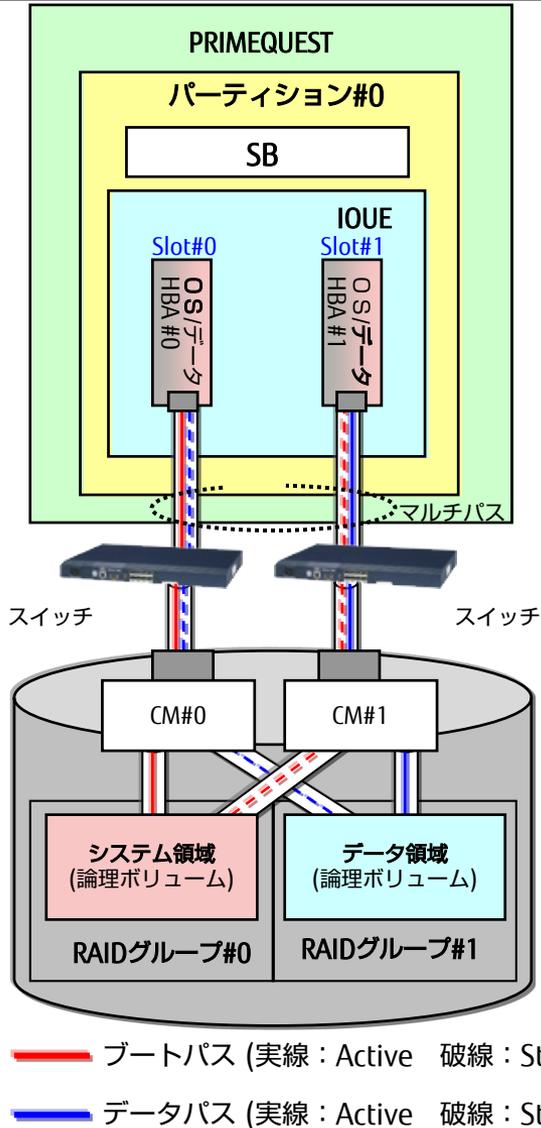
[設計/設定]

- ・ シングルチャネルカード4枚使用
- ・ 4本のパスを1つのマルチパスに設定
- ・ ブートパスとデータパスの担当CMを分ける

項目	動作説明
ロードバランス	<ul style="list-style-type: none"> ・ ETERNUS上位機種では接続した全パス間でロードバランス可能 ・ ETERNUS中下位機種では接続した全パス内の1/2のパス間でのみロードバランス可能。ただし、RAIDグループの担当CMを分割する事で、1/2のパス数でのロードバランスの多重実行は可能 <p>1つのRAIDグループは2ポート間でロードバランスされ、各RAIDグループの担当CMを分けることで2ロードバランス×2CM多重動作=4ポートでの同時動作が可能</p> <ul style="list-style-type: none"> ⇒正常時に、ブートパスは担当CM#0を使用 担当CM#0に割り当てたカード#0とカード#2間でロードバランス ⇒正常時に、データパスは担当CM#1を使用 担当CM#1に割り当てたカード#1とカード#3間でロードバランス
ActiveなHBAポート/HBAカード異常時の性能影響	<p>FCパスは縮退し、そのFCパスが接続していた担当CM配下のRAIDグループへのアクセスはロードバランスが停止する</p> <p>異なる担当CM配下のRAIDグループへのアクセスはロードバランスが継続する</p>
保守	<p>カードを交換するためには、パーティションを停止してIOUEを筐体から抜去する必要があるため、保守作業時は全LUNにアクセス不可</p>

4.5.3 アクセスパスの設計(3/5)

b. 2ポートの構成例



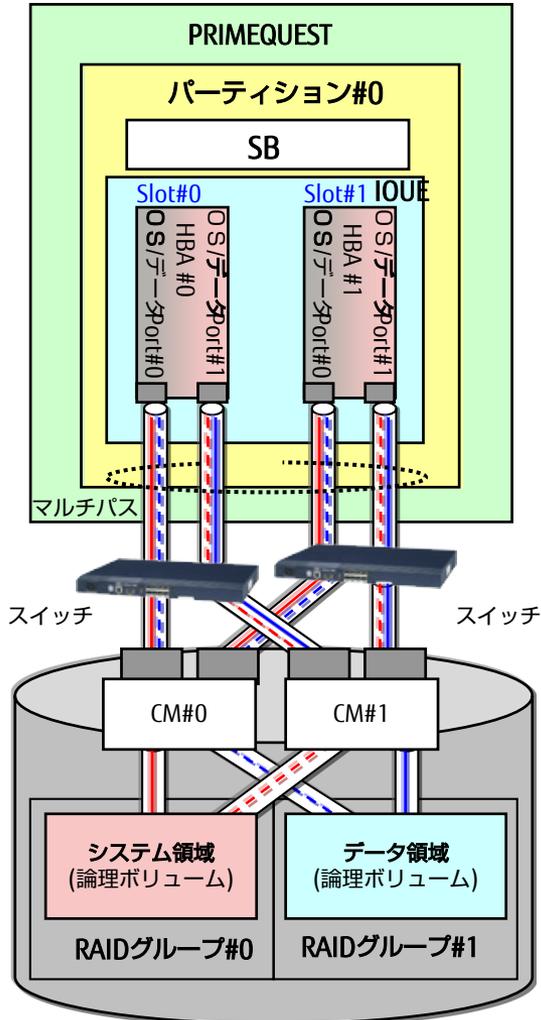
[設計/設定]

- ・シングルチャネルカード2枚
- ・2本のパスを1つのマルチパスに設定
- ・ブートパスとデータパスの担当CMを分ける

項目	動作説明
ロードバランス	<ul style="list-style-type: none"> ・ ETERNUS上位機種では接続した全パス間でロードバランス可能 ・ ETERNUS中下位機種では接続した全パス内の1/2のパス間でのみロードバランス可能。ただし、RAIDグループの担当CMを分割する事で、1/2のパス数でのロードバランスの多重実行は可能 1つのRAIDグループに対してロードバランスは行なわれないが、各RAIDグループの担当CMを分けることで 1ポート動作×2CM多重動作=2ポートでの同時動作が可能
ActiveなHBAポート/HBAカード異常時の性能影響	アクセスパスはStandbyパスへ遷移し、遷移したパスを使用していたRAIDグループへのアクセスは担当コントローラ外から担当CMへのアクセスによりコントローラ間でのデータのコピーが行われるため性能低下が発生 また、異なる担当CM配下のRAIDグループへのアクセスは性能低下しないが、遷移してきたアクセスパスとパスの共有となる為、あるRAID Groupの高負荷・過負荷に対しては影響が及ぶ
保守	カードを交換するためには、パーティションを停止してIOUEを筐体から取り出す必要があるため、保守作業時は全LUNにアクセス不可

4.5.3 アクセスパスの設計(4/5)

c. 4ポートの構成例



[設計/設定]

- ・デュアルチャネルカード2枚使用
- ・4本のパスを1つのマルチパスに設定
- ・システムパスとデータパスをデュアルチャネルFCカードへ均等に割り付ける
- ・ブートパスとデータパスの担当CMを分ける

項目		動作説明
ロードバランス		<ul style="list-style-type: none"> ・ ETERNUS上位機種では接続した全パス間でロードバランス可能 ・ ETERNUS中下位機種では接続した全パス内の1/2のパス間でのみロードバランス可能。ただし、RAIDグループの担当CMを分割する事で、1/2のパス数でのロードバランスの多重実行は可能 1つのRAIDグループは2ポート間でロードバランスされ、各RAIDグループの担当CMを分けることで2ロードバランス×2CM多重動作=4ポートでの同時動作が可能 ⇒正常時に、ブートパスは担当CM#0を使用 CM#0に割り当てた[FCカード#0-Port#0]と[FCカード#1-Port#0]間でロードバランス ⇒正常時に、データパスは担当CM#1を使用 CM#1に割り当てた[FCカード#0-Port#1]と[FCカード#1-Port#1]間でロードバランス
異常時の性能影響	ActiveなHBAポート異常時	アクセスパスは縮退し、そのアクセスパスが接続していた担当CM配下のRAIDグループへのアクセスはロードバランスが停止する 異なる担当CM配下のRAIDグループへのアクセスはロードバランスが継続する
	ActiveなHBAカード異常時	アクセスパスが縮退し、全てのRAIDグループへのアクセスはロードバランスが停止するが、CM間の多重アクセスは継続する
保守		カードを交換するためには、パーティションを停止してIOUEを筐体から取り出す必要があるため、保守作業時は全LUNにアクセス不可

— ブートパス (実線 : Active 破線 : Standby)
— データパス (実線 : Active 破線 : Standby)

4.5.3 アクセスパスの設計(5/5)



■ ETERNUSマルチパスドライバの留意点

 ETERNUS マルチパスドライバの詳細は『製品マニュアル』を参照

- 最大パス数は8パス
- 同じ型名のHBAでマルチパスを構成
- マルチパス構成で設計しても、Windowsインストール時はシングルパス構成にしてインストール
- MPIOの制御対象デバイス設定
 - ・ ETERNUSマルチパスドライバをインストールすると、MPIOのプロパティに制御対象デバイスの一覧が表示されるが、この一覧の情報は編集しない

■ ETERNUSマルチパスドライバ/OS標準のマルチパスドライバ共通の留意点

- 負荷分散ポリシーや再実行回数などの各種設定については、既定で使用する

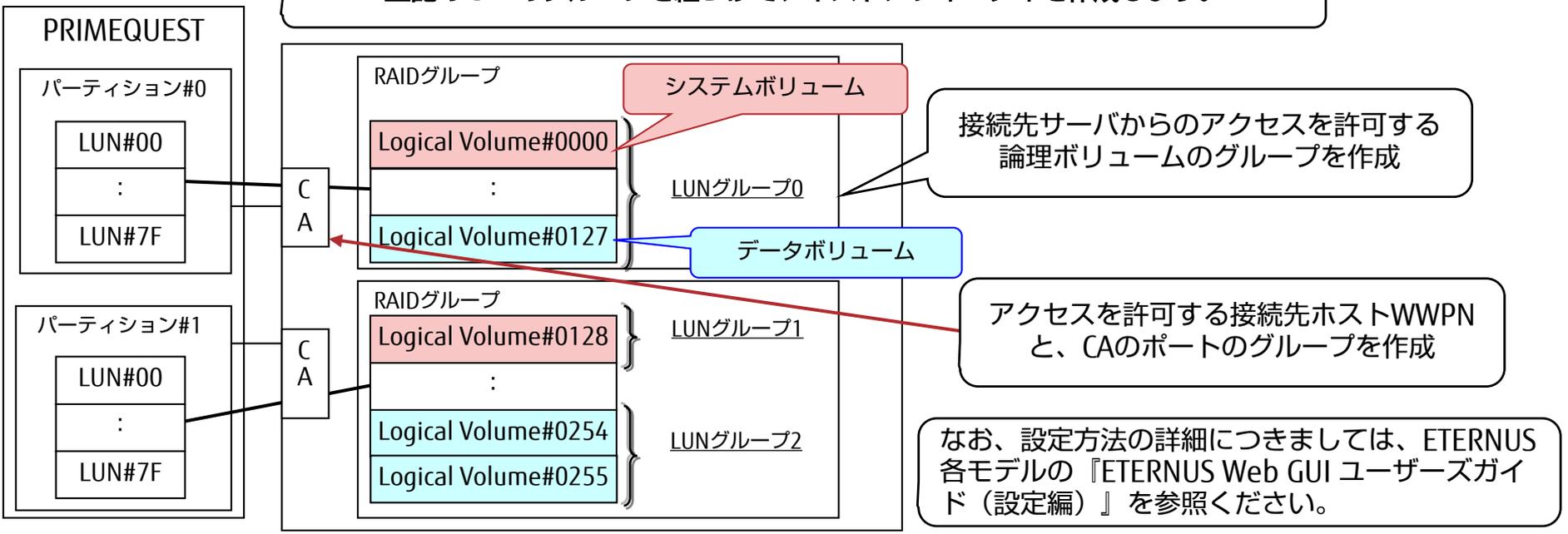
画面の名前	変更してはいけないパラメーター
Multi-Path Disk DeviceプロパティのMPIOタブ	負荷分散ポリシー、詳細ボタン、編集ボタン
DSMの詳細	タイマーカウンタ（パス確認期間、パス確認を有効化、再実行回数、再実行間隔、PDO削除期間）
MPIOパスの詳細	パスの状態

4.5.4 ホストアフィニティの設計

■ アクセス制限を行うホストアフィニティを設計する

設計項目	説明
ホストグループ	インターフェースタイプが同一であり、同じLUNグループをアクセスするホスト (HBA) をグループ化します。
ポートグループ	CAタイプが同一であり、指定したホストグループと接続されるポートをグループ化します。
LUNグループ	ホストが認識できるLUN (Logical Unit Number) をグループ化したものです。LUNグループでは、ホストLUN番号と装置内のボリュームの割り当て情報が設定されます。

上記の3つのグループを紐づけて、ホストアフィニティを作成します。



なお、設定方法の詳細につきましては、ETERNUS各モデルの『ETERNUS Web GUI ユーザーズガイド (設定編)』を参照ください。

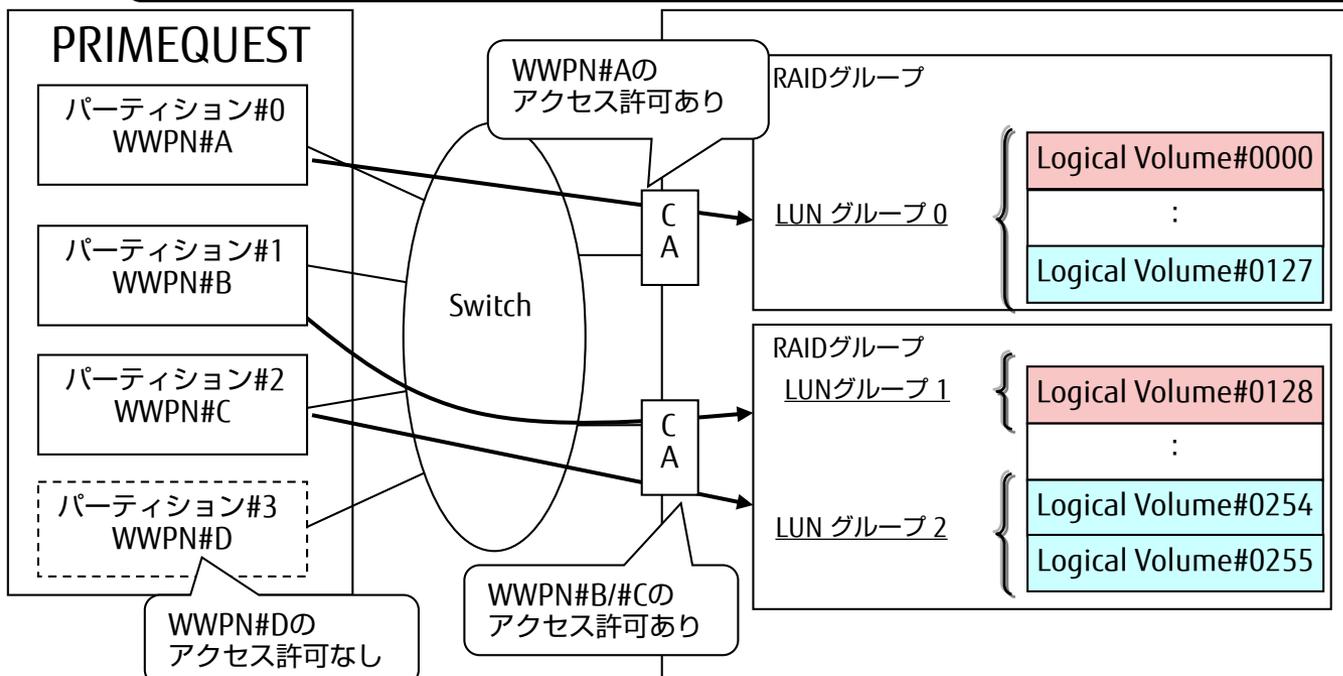
4.5.5 ホストアフィニティの定義(1/2)

a. FCブート/FCoEブートの場合

■ 論理ボリュームにアクセスできるサーバを定義するための設計

設計項目	説明
ホストグループ	同じLUNグループにアクセスするホスト(HBA)のWWPNをグループ化します。
ポートグループ	指定したホストグループと接続されるCAポートをグループ化します。
LUNグループ番号	ホストが認識できるLUN (Logical Unit Number) をグループ化したものです。LUNグループでは、ホストLUN番号と装置内のボリュームの割り当て情報が設定されます。

上記の3つのグループを紐づけて、ホストアフィニティを作成します。



システム領域の共有不可
 システム領域は複数サーバから共有できない
 必ずホストアフィニティ機能により排他を行なう

アクセス可能なサーバとアクセス可能なポートを制限し、ホストごとに異なるLUNグループを割り当てる

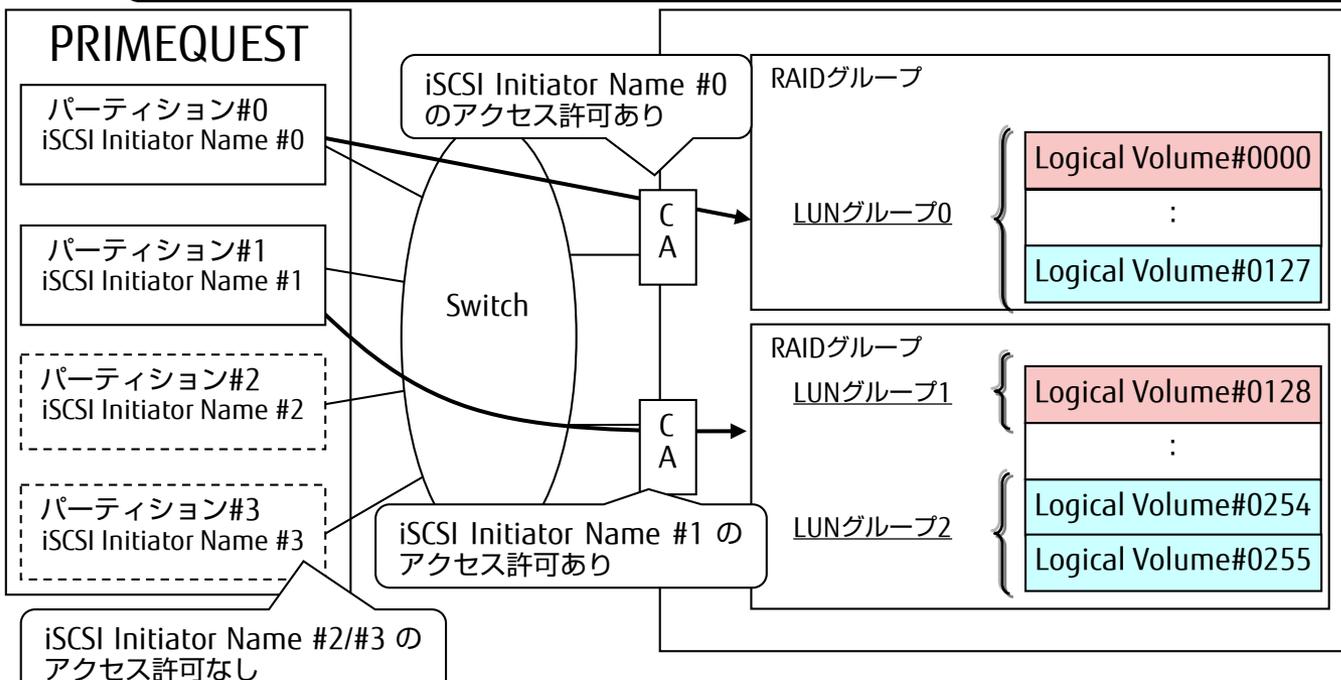
4.5.5 ホストアフィニティの定義(2/2)

b. iSCSIブートの場合

■ 論理ボリュームにアクセスできるサーバを定義するための設計

設計項目	説明
ホストグループ	同じLUNグループにアクセスするホストのiSCSI Initiator Nameをグループ化します。
ポートグループ	指定したホストグループと接続されるiSCSI CAポートをグループ化します。
LUNグループ番号	ホストが認識できるLUN (Logical Unit Number) をグループ化したものです。LUNグループでは、ホストLUN番号と装置内のボリュームの割り当て情報が設定されます。

上記の3つのグループを紐づけて、ホストアフィニティを作成します。



システム領域の共有不可
 システム領域は複数サーバから共有できない
 必ずホストアフィニティ機能により排他を行なう

アクセス可能なサーバとアクセス可能なポートを制限し、ホストごとに異なるLUNグループを割り当てる。

■ ブート形式によりスイッチを選択し、設計する

■ FCブートの場合

- ・ FCスイッチ：ETERNUS SN200シリーズ、Brocadeシリーズ

☞ ETERNUS SN200 series、Brocadeシリーズについては
『富士通ホームページ<https://www.fujitsu.com/jp/products/computing/storage/switches/fc-switches/>』を参照

■ iSCSIブートの場合

- ・ ネットワークスイッチ：SR-Xシリーズ、Cisco Catalyst シリーズ、等

☞ SR-Xシリーズについては
『富士通ホームページ<https://www.fujitsu.com/jp/products/network/lan-switch/sr-x/>』を参照

- ・ FCoEスイッチ：ExtremeSwitching VDX シリーズ(CNAを利用したiSCSIブート時に使用可能)

☞ Cisco Catalystシリーズについては
『富士通ホームページ<https://www.fujitsu.com/jp/products/network/lan-switch/cisco-sh/>』を参照

☞ ExtremeSwitching VDX シリーズについては
『富士通ホームページ<https://www.fujitsu.com/jp/products/computing/storage/switches/ethernet-fabric/>』を参照

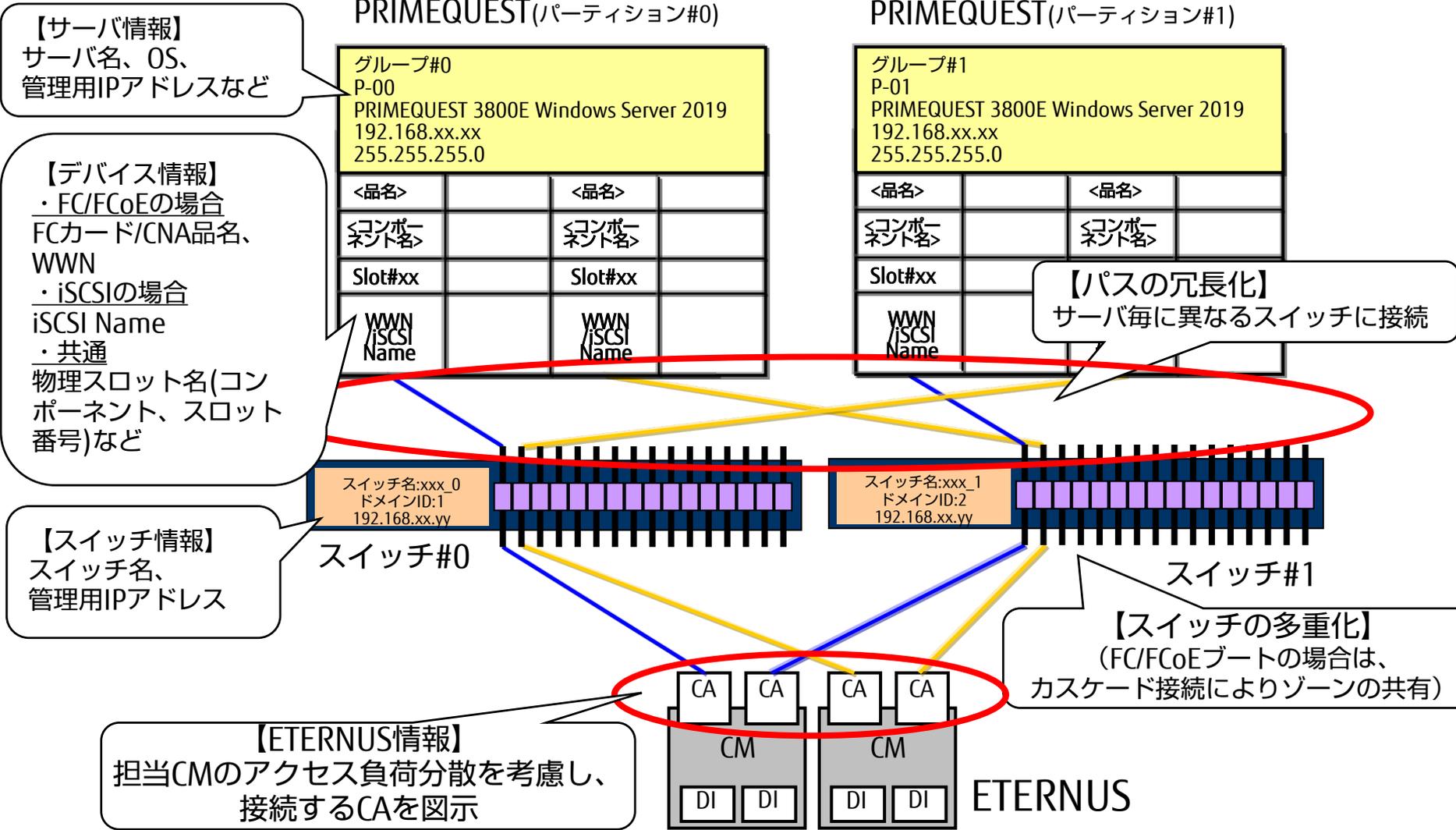
■ FCoEブートの場合

- ・ FCoEスイッチ：ExtremeSwitching VDX シリーズ

☞ ExtremeSwitching VDX シリーズについては
『富士通ホームページ<https://www.fujitsu.com/jp/products/computing/storage/switches/ethernet-fabric/>』を参照

4.7 ストレージシステム接続図の作成

PRIMEQUEST、ETERNUS、スイッチの接続図を作成する



■ ゾーニングの登録

■ FC/FCoEスイッチの場合

- FC /FCoEスイッチを多重化している場合で、FC/FCoEスイッチ間をカスケード接続していれば、1つのFC/FCoEスイッチにゾーニング情報を登録することで他のFC/FCoEスイッチにも反映される

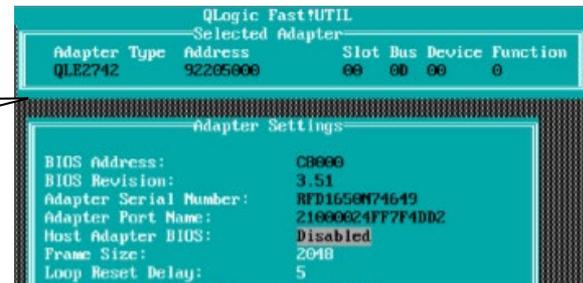


- 上記で作成したゾーン設定をゾーンコンフィグに設定、有効化する

■ 保守用にサーバ側WWNインスタンス管理表を作成する

- QLogic相当品 FCカードの場合
QLogic Fast!UTILを起動して、Adapter Port Name値、Address値を確認

QLogic Fast!UTILを起動(*1)



- Emulex相当品 FCカードの場合
LightPulse BIOS Utilityを起動して、Port name値、Mem Base値を確認

Emulex LightPulse BIOS Utilityを起動(*1)



- CNAの場合
Emulex One Connect FCoE BIOS Utilityを起動して、Port name値、Mem Base値を確認

Emulex One Connect FCoE BIOS Utilityを起動(*1)



*1)起動画面はファームウェア版数により異なります

サーバ側WWNインスタンス管理表			
Host name	サーバのホスト名		
IP Address	サーバのIPアドレス		
物理スロット名	FCカード/CNAのWWPN	物理アドレス	ケーブルタグ表示
FCカード/CNAが装着されているスロット位置	Port nameの値	[QLogic相当品の場合] Addressの値 [Emulex相当品の場合] Mem Baseの値	接続経路(接続デバイス、接続ポートの関係)を判断しやすいタグ名

■ ドライバパラメータのQueueDepth値を設定する

- OS起動後、管理者でログオン。その後、OneCommand Managerを起動し、ドライバパラメータ (QueueDepth値) を設定する
- 設定値は以下より求める

設定値
(推奨値 = $1024 \div 1$ つのCAポートに接続されるFC/FCoEポート数 \div LUN数) ・ 小数点以下は切り捨ててください ・ 算出値が「8」より小さくなる場合は、「8」を設定してください ・ 上記算出値をもとに、運用の中で最適な値を求め、設定してください

 FCの場合
最新情報はETERNUSマニュアル『ETERNUS DX, ETERNUS AF 構築ガイド (サーバ接続編) 富士通製ファイバチャネルカード ドライバ設定』を参照

 CNAの場合
最新情報はETERNUSマニュアル『ETERNUS DX ディスクアレイ ユーザーズガイド サーバ接続編 FCoE/Windows 用 富士通製コンバージド・ネットワーク・アダプターカード ドライバ設定』を参照

■ CNAのpersonalityの設定を確認する

- OneCommand Manager ユーティリティを使用する
- Personalityの設定値が“FCoE”であることを確認する

 詳細についてはドライバ添付の『コンバージド・ネットワーク・アダプタ ソフトウェアガイド』を参照

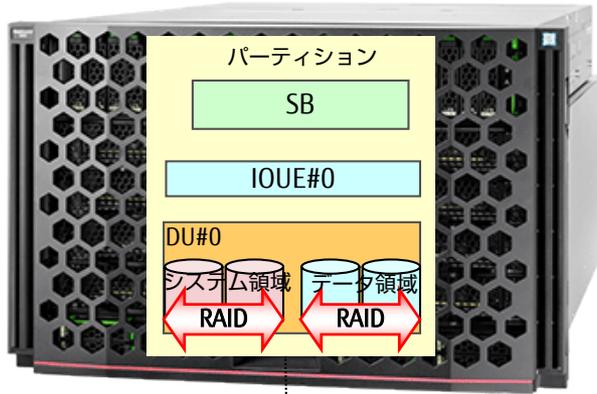
5. 構成例

Windowsで利用可能なディスク構成例を紹介します

5.1 内蔵ディスクブート構成例①

内蔵ディスクブート構成例

PRIMEQUEST



シンプルな構成、
低コストにディスク信頼性を確保

PRIMERGY



■構成例

- ▶1つのDU内にシステム/データ領域用RAIDを個別に構成 (高信頼化)
- ▶Arcserveでバックアップ(障害対策)(*1)

(*1)内蔵ディスクだけの構成で比較的データ量の少ない環境では、PRIMEQUEST筐体内パーティションにArcserve本体を配置する構成も可能

■ハードウェア構成例

製品名	個数
PRIMEQUEST	1セット
CPU/メモリ等	必要数
SB	1
IOUE	1
DU	1
SASアレイコントローラカード	1
内蔵ディスク	4
PRIMERGY(バックアップサーバ用)	一式

■ソフトウェア構成例(PRIMEQUEST関連)

製品名	個数
Windows Server 2016	(*2)
Arcserve Backup Client Agent for Windows	一式

■ソフトウェア構成例(PRIMERGY関連)

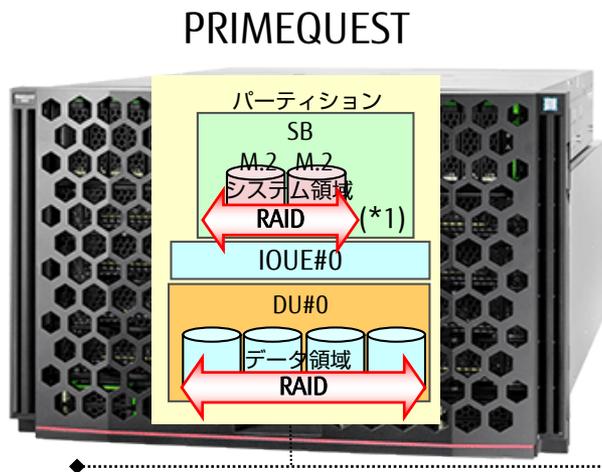
製品名	個数
Windows Server 2016	一式
Arcserve Backup for Windows	一式

*2)Windowsのライセンス使用条件については『マイクロソフトページ <https://www.microsoft.com/ja-jp/licensing/default>』を参照

5.2 内蔵ディスクブート構成例②

内蔵ディスクブート構成例

PQ筐体内でシステム/データ領域を個別に確保し、データ領域用ストレージを増大



PRIMERGY



■構成例

- M.2をシステム領域とする
- M.2をシステム領域として利用するため、内蔵ストレージベイ(DU)に搭載されるストレージをすべてデータ領域として使用することが可能
- DUをデータ領域とページングファイル格納場所として利用
- Arcserveでバックアップ(障害対策)

■ハードウェア構成例

製品名	個数
PRIMEQUEST	1セット
CPU/メモリ等	必要数
SB	1
M.2	2
IOUE	1
DU	1
SASアレイコントローラカード	1
内蔵ディスク	4
PRIMERGY(バックアップサーバ用)	一式

■ソフトウェア構成例(PRIMEQUEST関連)

製品名	個数
Windows Server 2016	(*2)
Arcserve Backup Client Agent for Windows	一式

■ソフトウェア構成例(PRIMERGY関連)

製品名	個数
Windows Server 2016	一式
Arcserve Backup for Windows	一式

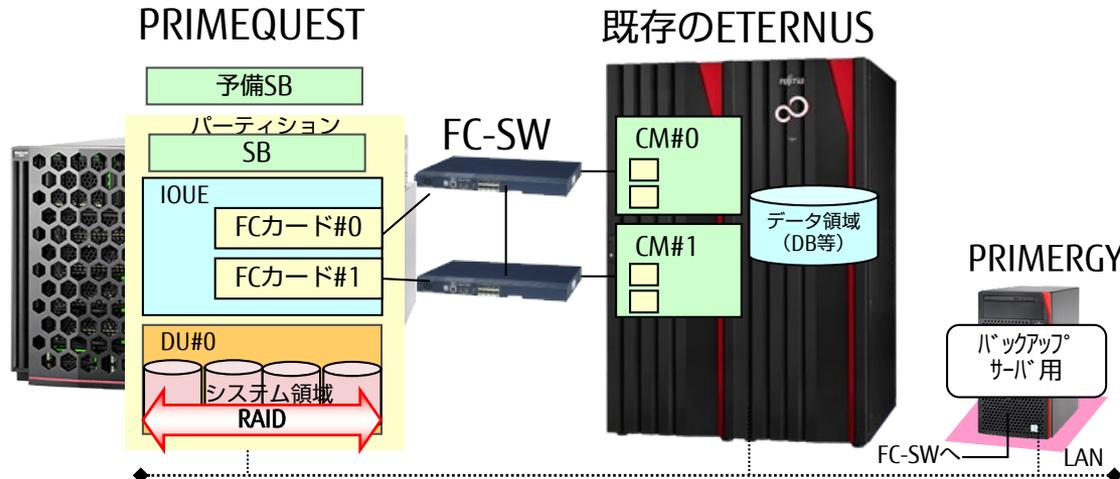
*1)UEFI時のみサポート

*2)Windowsのライセンス使用条件については『マイクロソフトページ <https://www.microsoft.com/ja-jp/licensing/default>』を参照



5.3 内蔵ディスクブート構成例③

既存ストレージデータへの接続例



比較的容易に
既存のストレージデータを
接続可能

- 構成例
- ▶ システム領域用にRAID構成(高信頼化)
 - ▶ データ領域用にFCカードをマルチパス構成(高信頼化)
 - ▶ SystemcastWizard Professional(SCW Pro)でシステムバックアップ

■ハードウェア構成例

製品名	個数
PRIMEQUEST	1セット
CPU/メモリ等	必要数
SB	1
予備SB(Reserved SB)	1
IOUE	1
FCカード	2
DU	1
内蔵ディスク	4
既存のETERNUS関連機器(HDD/FC-SW/FCケーブル他)	一式
PRIMERGY(バックアップサーバ用)	一式

■ソフトウェア構成例 (PRIMEQUEST関連)

製品名	個数
Windows Server 2016	(*1)
データベース (SQL Server/Oracle)	一式
ETERNUSマルチパスドライバ	1
SystemcastWizard Professional Agent for Server サーバライセンス	一式

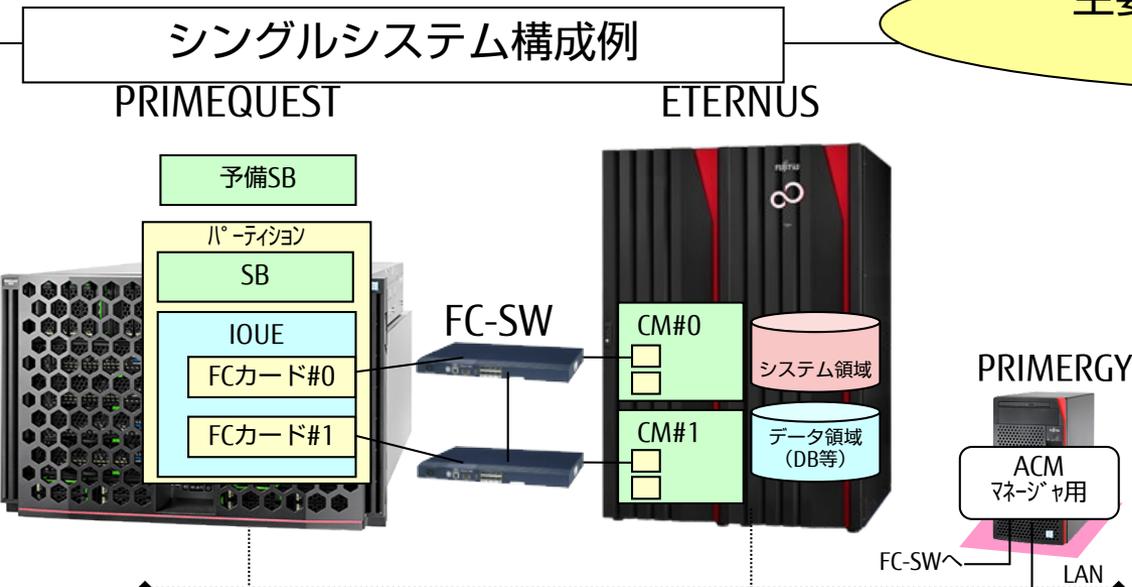
■ソフトウェア構成例 (PRIMERGY関連)

製品名	個数
Windows Server 2016	一式
SystemcastWizard Professional Manager サーバライセンス	一式

*1)Windowsのライセンス使用条件については『マイクロソフトページ <https://www.microsoft.com/ja-jp/licensing/default>』を参照

5.4 FCブート構成例①

主要ハード(メモリ、ディスク)の信頼性の確保が可能



■構成例

- ▶システム/データ領域用にFCカードをマルチパス構成 (高信頼化)
- ▶予備SBにより、SB故障時の早期業務復旧を実現
- ▶ETERNUS SF AdvancedCopy Managerで高速バックアップ (保守時間削減) (*1)(*2)

*1)システム領域のバックアップを行う場合は、ACMマネージャ用にPRIMERGYが必要
PRIMEQUEST筐体内の別パーティションにACMマネージャを配置することも可能
データ領域だけのバックアップを行う場合は、PRIMEQUEST筐体内パーティションにACMマネージャを配置することも可能

■ハードウェア構成例

製品名	個数
PRIMEQUEST	1セット
CPU/メモリ等	必要数
SB	1
予備SB(Reserved SB)	1
IOUE	1
FCカード	2
ETERNUS関連機器(HDD/FC-SW/FCケーブル他)	一式
PRIMERGY(ETERNUS SF AdvancedCopy Manager用)	一式

■ソフトウェア構成例 (PRIMEQUEST関連)

製品名	個数
Windows Server 2016	(*3)
ETERNUSマルチパスドライバ	1
データベース(SQL Server/Oracle)	一式
ETERNUS SF AdvancedCopy Manager - エージェント用	1

■ソフトウェア構成例 (PRIMERGY関連)

製品名	個数
Windows Server 2016	一式
ETERNUS SF AdvancedCopy Manager - マネージャ用	一式

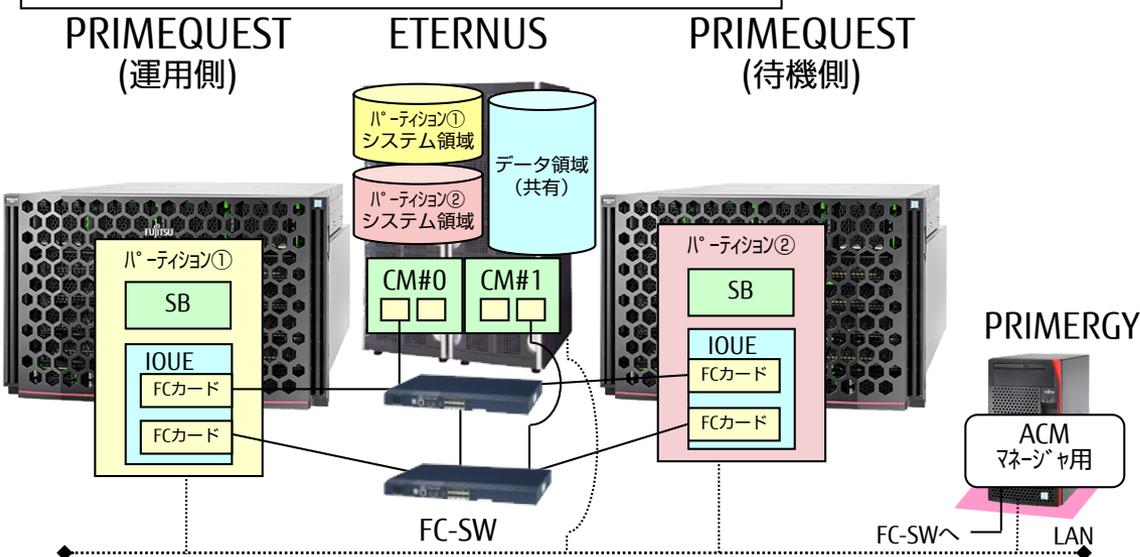
*2)その他バックアップ関連ソフトウェア/機器等が必要

*3)Windowsのライセンス使用条件については、『マイクロソフトページ <https://www.microsoft.com/ja-jp/licensing/default>』を参照

5.5 FCブート構成例②

筐体間クラスタシステム構成例

ソフトとハード両方の信頼性の確保が可能



- 構成例
- ▶システム/データ領域用にFCカードをマルチパス構成（高信頼化）
 - ▶筐体間クラスタ構成により、運用系サーバ故障時に待機側サーバへ切り替え(可用性向上)
 - ▶ETERNUS SF Advanced Copy Managerで高速バックアップ(保守時間削減) (*1)(*2)
- *1)システム領域のバックアップを行う場合は、ACMマネージャ用にPRIMERGYが必要。PRIMEQUEST筐体内の別パーティションにACMマネージャを配置することも可能
データ領域だけのバックアップを行う場合は、PRIMEQUEST筐体内パーティションにACMマネージャを配置することも可能

■ハードウェア構成例

製品名	個数
PRIMEQUEST	2セット
CPU/メモリ等	必要数
SB	1(計2)
IOUE	1(計2)
FCカード	2(計4)
ETERNUS関連機器(HDD/FC-SW/FCケーブル他)	一式
PRIMERGY (ETERNUS SF Advanced Copy Manager用)	一式

■ソフトウェア構成例 (PRIMEQUEST関連)

製品名	個数
Windows Server 2016	(*3)
ETERNUSマルチパスドライバ	2
データベース (SQL Server/Oracle)	一式
ETERNUS SF Advanced Copy Manager-I-エージェント用	2

■ソフトウェア構成例 (PRIMERGY関連)

製品名	個数
Windows Server 2016	一式
ETERNUS SF Advanced Copy Manager-マネージャ用	一式

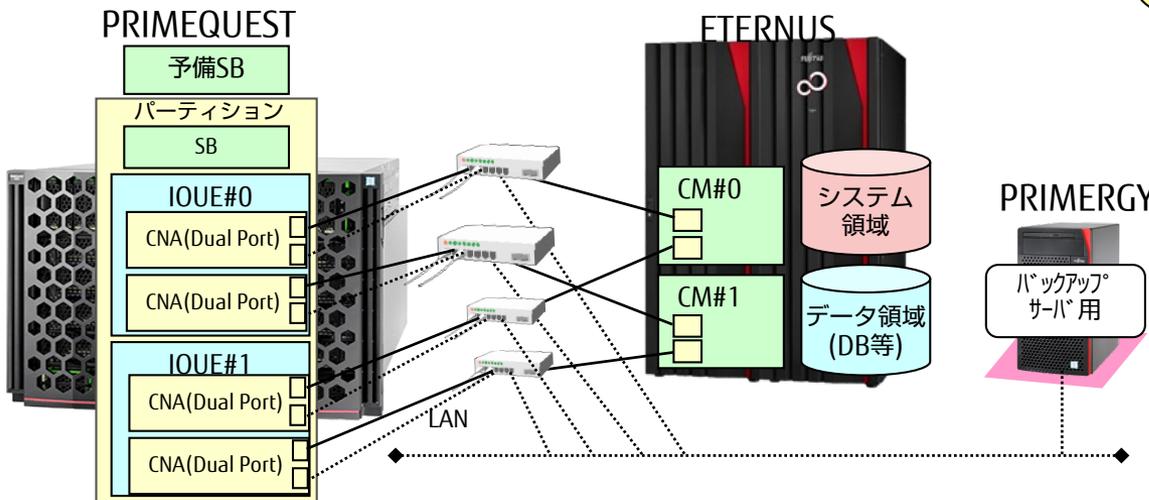
*2)その他バックアップ関連ソフトウェア/機器等が必要

☞ *3)Windowsのライセンス使用条件については、『マイクロソフトページ <https://www.microsoft.com/ja-jp/licensing/default>』を参照

5.6 iSCSIブート構成例

シングルシステム構成例

SAN 環境とLAN 環境を同じ物理ネットワーク上に統合



- 構成例
- システム/データ領域用にCNAをマルチパス構成(高信頼化)
 - 予備SBにより、SB故障時の早期業務復旧を実現
 - SystemcastWizard Professional (SCW Pro)でシステムバックアップ

■ハードウェア構成例

製品名	個数
PRIMEQUEST	1セット
CPU/メモリ等	必要数
SB	1
予備SB(Reserved SB)	1
IOUE	1
CNA	2
ネットワークスイッチ	4
ETERNUS関連機器(HDD/LANケーブル)	一式
PRIMERGY(バックアップサーバ用)	一式

■ソフトウェア構成例 (PRIMEQUEST関連)

製品名	個数
Windows Server 2016	(*1)
ETERNUSマルチパスドライバ	2
データベース(SQL Server/Oracle)	一式
SystemcastWizard Professional Agent for Server サーバライセンス	一式

■ソフトウェア構成例 (PRIMERGY関連)

製品名	個数
Windows Server 2016	一式
SystemcastWizard Professional Manager サーバライセンス	一式

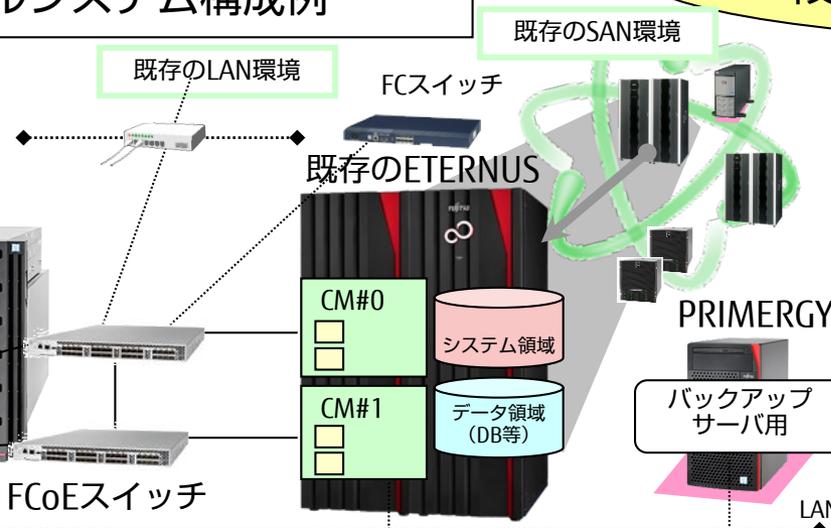
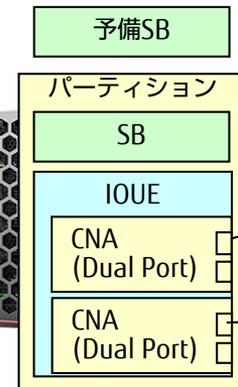
*1)Windowsのライセンス使用条件については『マイクロソフトページ <https://www.microsoft.com/ja-jp/licensing/default>』を参照

5.7 FCoEブート構成例

FCoE環境への移行のための
段階的な既存SAN/LAN環境の結合

シングルシステム構成例

PRIMEQUEST



- 構成例
- ▶システム/データ領域用にCNAをマルチパス構成(高信頼化)
 - ▶予備SBにより、SB故障時の早期業務復旧を実現
 - ▶Arcserveでバックアップ(障害対策)

■ハードウェア構成例

製品名	個数
PRIMEQUEST	1セット
CPU/メモリ等	必要数
SB	1
予備SB(Reserved SB)	1
IOUE	1
CNA	2
ETERNUS関連機器(HDD/FCケーブル他)	一式
Brocade VDXシリーズ (FCoEスイッチ)	2
PRIMERGY(ETERNUS SF AdvancedCopy Manager用)	一式

■ソフトウェア構成例 (PRIMEQUEST関連)

製品名	個数
Windows Server 2016	(*1)
ETERNUSマルチパスドライバ	1
データベース(SQL Server/Oracle)	一式
Arcserve Backup Client Agent for Windows	一式

■ソフトウェア構成例 (PRIMERGY関連)

製品名	個数
Windows Server 2016	一式
Arcserve Backup for Windows	一式

*1)Windowsのライセンス使用条件については、『マイクロソフトページ <https://www.microsoft.com/ja-jp/licensing/default>』を参照

付録A. システムバックアップ

Windowsで利用可能なバックアップ製品を紹介します

A.1 バックアップソフトウェアの選択

■ PRIMEQUESTに対応したバックアップソフトウェアを選択する

製品名	製品概要 / 特長
SystemcastWizard® Professional	ネットワーク経由で、ディスク単位またはディスク内のパーティション単位でバックアップする。UEFIブートエントリも復元できるため、ベアメタル状態からのシステムリカバリが可能。PRIMEQUEST（物理パーティショニング/拡張パーティショニング）とPRIMERGYを同じ操作感でバックアップ・リカバリできる。
Arcserve® Backup	レジストリ情報やシステム状態のバックアップが可能。テープ装置へデータを格納できる。SQL Server®, Exchange Serverなどと連携してDB業務を無停止でバックアップ可能
ETERNUS® SF AdvancedCopy Manager	ETERNUSと連携し、ディスク単位やディスク内のパーティション単位でバックアップする。Oracle®, SQL Server®, Exchange Serverなどと連携してDB業務を無停止でバックアップ可能
Windows Server® バックアップ	Windows標準添付ソフトウェア ボリューム単位でバックアップする。テープバックアップは未サポート。 保存先はローカルディスクで、一回限りのバックアップの保存先はネットワーク接続されたフォルダにも可能

- バックアップ製品情報については『富士通ホームページ <https://www.fujitsu.com/jp/products/software/>』を参照
各バックアップソフト(Windows Server® バックアップを除く)のWindows Server対応状況は製品ホームページ 動作確認機種』を参照
- ・ SystemcastWizard® Professional : <https://www.fujitsu.com/jp/software/scw/environment/hardware/>
 - ・ Arcserve® Backup : <https://www.fujitsu.com/jp/products/software/partners/partners/arcserve/>
 - ・ ETERNUS® SF AdvancedCopy Manager : <https://www.fujitsu.com/jp/products/computing/storage/software/sf-acm/>

システムボリュームをバックアップするさいのディスクに関する考慮点

■ テープ装置へバックアップする場合

 テープ装置のWindows Server 対応状況に関しては『システム構成図』を参照

■ 余裕をもったバックアップ運用をスケジュールする

[理由]

ディスク断片化により読み取り性能が低下するため、バックアップデータの総容量は同じにもかかわらず、導入当初よりもバックアップに時間がかかってくる場合がある

■ 運用停止のメンテナンス時にデフラグを行う

[理由]

デフラグにより断片化を解消できるが、運用中にはファイルを失う可能性があるため

■ ハードディスクへバックアップする場合

■ バックアップ時の書き込み特性やリストア時の読み出し特性を考慮して、バックアップサーバーのRAIDを設計する

[理由]

- RAID構成の特性によりバックアップリストアの転送速度が異なるため
- RAID1はミラーリングで単純に冗長化を行うのでそれほど性能劣化は起こらない
- RAID5はパリティを作成して冗長化を行うため、処理が複雑で低速になる
- RAID1+0はRAID0のストライピングによる分散書き込みの特性も持っているため高速

版数	日付	変更箇所	変更内容
01	2017-11-08	・新規作成	—
02	2019-04-03	・全体	<ul style="list-style-type: none">・ PRIMEQUEST 3400S2 Lite / 3400S2 / 3400E2 / 3400L2 / 3800E2 / 3800L2に対応・ WS2019情報の追加・ 「1.1.3 SVIMインストール時のパーティション」を追加
03	2019-07-02	・全体	<ul style="list-style-type: none">・ DU_PCIEA情報の追加

■ 著作権・商標権・その他の知的財産権について

コンテンツ（文書・画像・音声等）は、著作権・商標権・そのほかの知的財産権で保護されています。本コンテンツは、個人的に使用する範囲でプリントアウトまたはダウンロードできます。ただし、これ以外の利用（御自分のページへの再利用やほかのサーバへのアップロードなど）については、当社または権利者の許諾が必要となります。

■ 保証の制限

本コンテンツについて、当社は、その正確性、商品性、御利用目的への適合性などに関して保証するものではなく、その御利用により生じた損害について、当社は法律上のいかなる責任も負いかねます。本コンテンツは、予告なく変更・廃止されることがあります。

不明な点は、「本製品のお問い合わせ」

(<https://www.fujitsu.com/jp/products/computing/servers/primequest/contact/>)よりお尋ねください。

無断転載を禁じます。

CA92344-2154-03

2019.07



FUJITSU

shaping tomorrow with you